

前の狂者傳道

耶穌は奇蹟を行はるゝや、必らず秘密を守るべきを求め、「何人にも告ぐる勿れ」と命ぜられた。然るに此の時のみは其の地方を去らるゝので唯だ好奇心に驅られて、教訓には耳を傾けやうともせず茫然たる群衆の集り來る虞れがなかつたので、平生の習慣を破られ、退去の後に噂の傳はるべくば、其の奇蹟の廣く人の知る所とならんとを望まれたのであつた。此の男は感謝胸に溢れて『往きて耶穌の己れに行し給へる大いなる事をデカボリスに言ひ揚らしければ衆人皆駭き合へり』。彼は耶穌の同伴として其の使徒の列に加はるを許されなかつたけれども、尙ほ他の方面に採用せられ、彼等に劣らざる神聖な事業に當らしめられた。彼は己が郷國に残留して其の同胞の間に活動し、彼を恵まれたる其の恩寵の活ける記念として、之を聽くものは皆祝福を受けた事であらう。

第貳拾參章

カペナウンへ歸還

『死は明かに確かきなりぬ。』

然れど主に取りては墓はしき休憩のみ。

見よ、主の遣し給へる此の賜は、生命の門戸のみ。

慰藉の端緒のみ。

神の聖き山頂への楷梯のみ。

而して此の聖き幕屋への門は神之を備へ給へり。

人の作れるに非ず』

セント・ペルナルド

(太九〇十八―廿六、可五〇廿一―四十三。路八〇四十一―五十六、太九〇廿七―卅一)

歸還

耶穌のカペナウンの渚に再び近き給ふに及んで熱烈な群衆は歡び迎へた。彼等は昨夜耶穌の此の町を去らるゝを惜んだのであつたが、小舟の此方へ向ふ

のを見て、其の上陸地點に群がり來つて口々に歡びを述べた。其の間に肩摩殺撃た
 る此の群衆に混ざるのを避けて佇んだ一人物があつた。即ち會堂の宰つかさヤイ
 の願の願ロと言ふもので、今は痛切な心配を抱く身の上であつた。即ち彼は十二歳
 になる獨り娘が死に瀕してゐるので、來つて之を救はれんことを耶穌イエスに願つた。數
 月前に會堂の長老の代表者が、百夫長ひやくにんのをさの愛した奴隸の件を以て耶穌イエスを迎へて見えた
 事(路七〇)があつたが、恐らくヤイロも其の一人であつたであらう。何れにしても彼
 は此の時の長老等の行動を知れるは確かで、今其の曾つて行はれた事件を回想し、
 此の次たびは己が必要に迫まれて、遂に耶穌イエスに願ひ出づるに至つた。耶穌イエスは直ちに之
 に應じて、群がる人々に押されつゝ、宰つかさの家に向はれた。群衆は新たな奇蹟を實見す
 べき好運に騒ぎ立つたが、其の歎願者の階級の高さより、彼等の注意は一層深さを
 加へた。

血漏
 の婦
 人

耶穌イエスの病者を癒やさるゝ能力あることは明かであつたけれども、未だ

曾つて死者を甦よみがへされた事はなかつた。故に直ちに其所へ赴かるゝ事を特に必要と認
 められ、一瞬時の猶豫も成り難さを覺えられた。斯く焦慮せる父は群衆の押合ふさへ
 も、もどかしく感じたものを、急に耶穌イエスの聖足みちを留むべき事件の突發したとき彼は
 如何ばかり狼狽した事であらう。群衆の中に一人の婦人が加はつてゐた。彼女むすめは十
 二年の間、慘憺たる血漏の病に冒されて、何れの醫師も皆ヒを投ずるほどの重症で
 あつた。聖マコは嘲ける如き調子を以て『此の婦多くの醫者の爲めに甚だ苦しめら
 れ、其の所有しんぶいをも盡く費やしけれども、何の益もなく轉かつて悪かりし』と記してゐ
 る。當時の醫術を思へば此れは決して怪しむに足らぬ。ブリニイは當時の醫者が診
 斷不明の病氣に對して用ふる處方を擧げたらちに、様々ある藥種の特別なるものと
 して臚ろばの新しい糞よんの練藥と山羊の尿の内服藥を教へてゐる。當時の諺にも、醫者に
 就いて當然と思はるゝ語ことばがあつた。ラテンの諺に『醫者の命に服するより悲しむべ
 き生活はなし』と言ひ、又『醫者は強盜より甚だし、強盜は金錢若くば生命の何れ

かを奪へども醫者は其の兩者を奪ふ』と。又ユダヤ教經典には『醫者中の最善なるものも地獄に墮つ』とあつた。

主の外
套の裳

此の婦人は群衆の中に混じて、耶穌の後ろに匍ひ寄りつゝ、忍びやかに其の衣の裳に觸つた。彼女は心私かに「衣にだに捫らば、助かるならん」と考へた。恰かもパウロの體に觸れた手拭や、前掛を病人の爲めにと持つて歸つたエベソの市民(使十九)の如く、彼女は耶穌に唯だ觸つたのみで、不思議の効果あるべしと考へた。畢竟迷信的思想である。然かも其の間に尙ほ信仰の潜めるため、其の信仰は豊かに酬るを得たのであつた。『斯くて血の漏づる事直ちに止まり、既に疾癒えしと身に覺えたり』。彼女は其の全癒を私かに喜びつゝ、隠然摺抜けんと思ひた。然るに一層宏大なる恩寵は彼女の爲めに蓄へられ、押し合ふ群衆の込む中に、耶穌は打震ふ潺湲い手が、其の外套の裳に觸つたのを認められた。耶穌は之を其の同情と救拯とを懇願する語と同様に認めて、無言の要求に應じ忽ちに癒やされ

たのであつた。其の懇願者の何者なるや、或は病氣の種類の如何を知られざるも、之を嘉納せられたのであつた。是れ耶穌の憐憫と權威との漲り出づべき公開の門戸であつて、其の要求の如何を認めざるに先立ちて之を供給せられたのであつた。『基督が其の恵むものを知らずして恩寵を濫がれたるは解するに苦しむ』とカルヅキンは言つた。然し畢竟是れ耶穌は己れに求むるものには人の如何に拘はらず、其の慈愛と厚意とを垂れ給ふ證據に過ぎない。其の在世の日に、人間として制限を免れ給はないときにも尙ほ其の懇願者の如何を知るを待たずして、彼等の要求に應ぜられたのであつた。耶穌に取つては助を索むることを悟らるれば充分であつて、喜んで之を嘉納せられたのである。

『我が衣
に觸りし
ものは
誰ぞ』

婦人は秘かに遁れやうと考へたけれども、耶穌は之を認めて、後ろの群衆へ振り向きつゝ、『我が衣に觸りしものは誰なるか』と問はれた。弟子たちは驚いたが、例に由つて一同の代言役のペテロは『衆人汝に押し合ひ

迫まるに「我に捫るものは誰ぞ」と曰ひ給ふや」と叫んだ。耶穌は之には答へず、振り返つて、其の者を發見せんとして探索せられた。婦人は「恐れ戦慄き」近づき來つて其の一切の事を打ち明けたが、耶穌は「女よ、心安かれ汝の信汝を救へり安泰にして往け」と命ぜられた。

婦の
發見

元來此の婦人の希望したやうに、秘密のうちに事實を葬るのが情愛ある行爲である。然るに耶穌が之を面前に引き据えて、衆人環視の下に其の秘密を公言せしめらるゝは残酷ではなかつたか。尙ほ耶穌の平生にも似合はしからざる所業である。耶穌は其の恩寵裕なる奇蹟を行はるゝに當り、之を受たるもの秘密を保つ事を望まるとのが常であつた。或は婦人をして私かに通れしめて、其の受けた奇蹟に満足し、望がまゝに隠れしむるのが耶穌の當然採り給ふべき道であつたと思ふものもあらう。然し耶穌が己れに觸れたものを發表せられたのは勿論衆人の面前に讚嘆せられん事を望まれたからではなかつた。耶穌自らの爲めより言は

ゞ此の奇蹟が好奇心に富む群衆の知らざるまゝに終るのを勿論喜ばれたと相違はない。然し斯く取計はれたのは婦人其の人の爲めであつた。若し彼女が遁れ行くに任せらるゝならば、其の生涯に受くべき最大なる恩寵を失ふべき筈であつて、肉體は全快しても、靈魂の病は曾つて癒やさるべき機會は無かつた事であらう。耶穌の能力は之を悟るを得ても、其の慈愛に觸るゝの便りは絶えたであらう。其の慈愛に溢るゝ「女よ、汝の信仰、汝を救へり、安全にして往け」との聖語を聞くは、群衆環視の中の耻かしさに萬、勝さるの價值あるものであつた。

カイザリ
ヤビリビ
の記念像

傳説に由れば婦人の名はゲエロニカと言ひ、フキニシアの市カイザリヤ・ビリビより來たものであつたと言ふ。四世紀の始めには、此の市に此の婦人の家と稱せらるものが残存し——高き石の壇上に、上衣を纏つた男子の前に、兩手を擴げて一人の婦人が跪き、其の上へ男子も片手を伸べてゐる黄銅の像があつて、其の男子の脚下には萬病を治するに足ると言ふ不思議な草が裳に纏り

つつ生えてゐる形があつた。此れ耶穌イエスと此の婦人とを表はす像で、其の救主の慈愛を表彰する記念の爲め婦人が建造したものと傳へられた。此れに由つて婦人が異邦人であつたことは疑ひなき所である。若し彼女がユダヤ人であつたとすれば、其の觸つたものは必ず宗教上穢れを受くべきを知り、戶外へ其の穢れた身を以て出て行く筈はないのである(利十五〇十)。要するに彼女は異邦人であつて、廣く傳つた耶穌イエスの噂を聞いて、不治の病の爲めに之を尋ねることとなつたのであらう(可三〇七八)。

慟哭
の家

彼が繋いだ一縷の望も今は全く絶えたとの便りはヤイロの許に達したが、耶穌イエスは尙ほ婦人に語ことばを掛けて居られた。「汝の女むすめは既に死たり。何ぞ師を煩はすや」と使の者は言つた。耶穌イエスは言下に「懼るゝ勿れ、唯だ信せよ」と命じ、一行を伴ひて其の家に赴き、其の特に愛せらるゝペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人のみを従へ室内に歩を移された。騷擾囂しき慟哭の光景は其の前に開展した。古への習慣では、備はれた哀者なきてが笛に合せ、聲を揚げて慟きを咬そり、知人の群は、或

は友情より悲しみに堪へずして、或は葬式の振舞を目的に、夥しく集つて來た。是れ耶穌イエスの聖眼みめには痛ましき光景であつた。死に對する耶穌イエスの見解は斯くの如きものではない。「神の前には皆生けるものなり(路廿〇)」として死を働はたらけくを誠められた。「暗と死との大海を壓して、光と命いのちの無限の大海は漲る」。耶穌イエスは決して「死」と云ふ語ことばを用ひず、「眠る」と云ふ語ことばを適用せられた。此の光景を痛んで「何ぞ忙亂さばぎ且つ哭くや」と先づ彼等を誠飾し、「女むすめは死ねるに非ず、唯だ寝ねたるのみ」と仰せられたが、之を聞く一同は哂笑つた。然るに耶穌イエスは其の嘲笑するものを驅逐して、兩親及び三人の弟子を伴ひ、其の室に入り、娘の潺弱せせき手を取りつつ、母の其の愛兒いとこに言ふ如く「タリタクミ、我が小羊、起きよ」と仰せられた。見よ、眠れるものは之を聞いて眼を開いた。其の快癒には時間を要せず、豫後もなかつた。致命の重症跡方もなく、完く快癒したのであつた。「直ちに女起きて行めり」。耶穌イエスは亞いいで食物を之に與へよと兩親に命ぜられたので、茫然たりし彼等は漸く我

れに歸つた。彼等は娘の物を食ふのを見て始めて其の全快したことを確實に認められたことであらう。

二人
の警者

是れ實に驚駭すべき奇跡であつて、耶穌の未だ會つて行はれざる最大の不可思議であつた。死人を始めて甦されたので、戸外の群衆が之を傳へ聞かば、如何なる騷擾の湧き起るべきかを豫期せられた耶穌は私かに家を忍び出て歸途を急がれた。途上街路を過ぎらるゝに當り二人の警者が其の救ひを求めた。歸途に心急がるゝまゝに足を早めて歩まるゝ後より彼等は暗鬱しく騒ぎ立ち「ダビデの裔よ、我等を憐み給へ」と叫んだ。然し耶穌は尙ほ振り向きもせず只管に急がれた。遂に彼等は耶穌の入らるゝ家の戸口まで追ひ縋つて來たので、漸く彼等に向つて「我れ此事を爲し得ると信ずるや」と問はれたが、彼等は「主よ、然り」と答へた。耶穌の胸に憐憫の情は溢れた。彼等は耶穌の慈愛漲る聖容を見る能はざりしも尙ほ、其の柔和な聖手の觸るるを感知するを得た。耶穌は又耳に激しく響く語を

以て彼等を驚かすを憚かり、其の同情を感得せしめんとして替いた眼に手を按いて「汝等の信ずる如く、汝等に成るべし」と仰せらるゝや否や彼等の眼は開いた。然し此の奇蹟の擴まるとき、其の紛擾の煩はしさを知つて——一般の騷動を引き起して、當惑せらるる事件の愈續出すべきは當然であつた——二人の者を堅く誠めて、聖容にも手振りにも力を籠めつゝ、「慎みて人に知らずる勿れ」と命ぜられたけれども、其の訓誡も更らに効果なく、彼等は出て遠近に其の實驗を噂し歩いた。

第貳拾四章　　パリサイ人シモンの家にて

『耶穌を尋れつゝ、彼女は客人の騷擾も心せず

聖足に膏を澆ぎ、悔悟の涙に洗ひ、髮以て之を拭へり

斯くて罪過の赦しを受くるに足りぬ。』

『己れを洗ふものを耶穌は深め給へり、泉の河に水を送る如く、

花は恵みの露を摘し、又露のうちに花咲く如く、

天の地へ露を送りて、地は又天に雨を供ふる如く。』

中世紀讀美歌

(路七〇廿六―五十)

カペナ
ウンの
足の

此の三回の奇蹟、殊にヤイロの娘の甦されてより、耶穌は遂にカペナ
ウンに滞留せらるゝことが出来なかつた。魚騷擾は甚だしく、到底傳道

の不可能なるに及んで、止むなく他へ轉ぜられざるを得ざることとなつた。既に一
次びは群衆を避けて湖の東岸へ赴かれたのであるが、其所にも隠家を得られなかつ
たので、前年の如く内地に分け入らんが爲めガラリヤに傳道旅行を試むる決心をせ
られた。斯くて直ちにカペナウンを發足して先づ湖の岸を南に二三哩に存在するマ
グダラの町に來られた(可六〇一、六〇太)。

パリサイ
人の
招宴

ヤイロの娘を甦されたことは、從來群民の間のみに行はれた所を、カ
ペナウンの町の有力者の一人たる教會の指導者の爲め行はれたと言ふの
で特に注意を曳いたのであつた。此れに由り從來唯だ群民の煽動者として蔑視せら
れ給へる耶穌が、世の視聽を曳かるるに至つたが、其の風潮の變化は忽ちに事實と
なつて現はれて來た。マグダラの町に着せらるるやシモンと稱するパリサイ人の家
より招待を受けられたのが其れであつた。シモンはカペナウンの同僚に與へられた
不思議な恩寵を聞き傳へたに相違なく、偉大なる預言者か、然らずんば之に勝ざる

人物ならんと認め、耶穌を一層深く研究せんが爲めに其の家に宴を設けて之を招待したのであつた。耶穌は其の招待に應ぜられた。斯くの如き集會は其の好まるゝ所であつた。勿論宴會を好まるゝのではないが、唯だ其の先驅者ヨハネの制慾主義と異り、人と交際するを好まれ、斯くの如き席上に於ては天國の事情を説明せらるべき機會が得らるゝからであつた。此れまで耶穌を招待したるものは多く税吏の如く世の擯斥を受くる階級の人々で、彼等と親しくせられた爲めに「税吏罪ある人の友」なる綽名をすら受けられた。然るに今日耶穌を招待したものはパリサイ派の一人であつた。此の物語を傳ふるものは聖ルカであつて、彼は他に二回耶穌がパリサイ人の家に招かれて、其の歡待を受けられたことを記してゐる（路十〇三―七）是に由つて僅かに主の傳道期間の特殊な方面が埋没せられずに済んだ譯である。一方税吏の友たらしむると同時に、又パリサイ人の友たられたことは其の同情の普偏なるを示めすに足り、パリサイ人必らずしも皆耶穌の敵のみならずざるを發見するのは愉快である。

耶穌に對し不遜

シモンは眞に敬虔な人物であつた。然し尙ほ其の黨の偏見を脱する能はず、耶穌を其の家に招いて食卓に着かしむることが既に自ら卑下した行爲であると感じ、威儀を正して傲然大風に耶穌を迎へ、客として盡すべき當然の禮儀をすら執らなかつた。主が此の家に來られても、主人は歡迎の接吻を献げず、又奴隸をしてサンダルを解かしめず、聖足の塵をも洗はしめなかつた。食卓に看かると、其の頭へ涼しき香油を塗るものもなく、此等普通の禮義すらも略せられたが、耶穌は別に意にも介せず、天然自然の威嚴を保つて平然として居られた（撒前十廿〇三十七太二十六四十八約一〇廿七）（撒前五〇十詩三十三〇五傳九〇八參照）。

罪ある婦
聖足の下
に近く

來客一同、東洋の風習に従つて、食卓を圍む斜の寢臺に横はつて席に着するや否や一事件が突發した。客の來着に紛れて一人の婦が彼等の間へ忍び込んだのであつた。然かも其の婦の行動に徴して、髪を捌いてゐたことが

明であるが、此れはユダヤに於ては娼妓の風俗である。若し此所を税吏の家ならしめば娼妓の現はるゝも敢て不似合ではないが、此れはパリサイ人の家であつた！彼女は何の爲め來たのであらうか。蓋し耶穌を尋ねて此所へ來たのであつた。カペナウに於ける耶穌の行動は彼女の耳にも達し、又マダガラへ來着せられて後の説教も聞いたことであらう。斯くして其の悲惨な境界が我れと覺られたが、此の福音に接するに及んで、希望は油然として彼女の胸にも湧いた。耶穌は彼女と擇ぶ所なき罪惡の結塊をも救はれたと言ふ、又彼女をも救はるゝ力はないであらうか。彼女は耶穌がシモンの客となられた事を知り、押して其の家に赴いて、其の聖足の許に平伏す決心を固めた。然かも素手では來なかつた。「罪人の友」は彼女の全靈を吸引せられ、彼女は恭敬、愛慕の誠を表はすべき貢を献げざる可らざるに至つた。即ち蠟石の器に盛つた香油を購ひ、パリサイ人の家へ齎らして來たが、來客の間に潜みつゝ、耶穌の冷遇を受け給ふ狀を目撃してゐたのであつた。故に耶穌の其の席に着せ

らるゝを待ち彼女は進んで、聖足の下に佇み、雨の如き涙は我れ知らずはらくと聖足の上に落ちた。彼女は更らに其の捌いた髪を以て、聖足を穢す涙を拭ひ、慕い奉る聖足に熱く接吻しつゝ、聖頭を憚つて、其の聖足へ膏を塗つた。

パリサイ人の驚駭

主人は戰慄した。斯くの如き婦に觸るゝさへ、否な之を見るさへ、彼の心には汚辱を感じるのであつた。聖アウガスチンは「斯くの如き婦人

若しパリサイ人の家に近んか、彼はイザヤの語を藉りて「我に近づき、我れに觸るゝ勿れ、我れ汝よりも聖し」と叫べる事ならん」(賽六十)と言つてゐる。彼は恐怖と憤慨とに言句も塞がつた。嗚呼思へば彼は欺かれた！耶穌を一個の預言者と見做し、其の資格ありと思へばこそ家にも招いたのであつた。然るに預言者に非らざるは明かであつた。預言者なりとせば、婦の品性を識別し、之を一蹴し去らるべき筈であらう。彼はパリサイ人の傲慢を具へてゐたけれども尙ほ充分の教養あり且つ寛大な推量を有する人物であつたので、深く自らを制して一語も言はなかつた。而して耶穌の聖

足を只管に愛撫する婦を見て、全く耶穌が婦の何者なるかを知られざる結果であると判断して柔かに忍んだのであつた。然し彼の所作には、此の事件に一層不都合な解釋を下してゐる態が好く表はれてゐた。即ち一語も言はないけれども、彼の胸中は明かに其の顔が物語つてゐるのであつて、耶穌は之を早くも讀んで、真に自ら預言者にして、更らに預言者以上のものなるを證明せられた(太十一〇十九路 七〇卅四参照)。「シモンよ」と鄭重に話し掛けて、「我れ汝に言ふ事あり」と仰せらるゝに答へて、彼も亦慙慙に「師よ言ひ給へ」と請ふた。「或る債主に二人の負債人ありて一人は金五百、一人は五十を負りしに、償ひ方なければ債主此の二人を免したり、然れば二人の者らの債主を愛する事孰れが多き、我れに聞かせよ」と更らに問はれた。「我れ想ふに免さるゝ事の多きものならん」と見當違ひの問題をと言はぬばかりに彼は頗る冷淡の態度で答へた。耶穌は彼の正直な答辯の意義を明かにして進んで其の比喩を此所に適用せられた。「汝が想ふ所違はざるなり！」と其の脚下に蹲

主の辨明
少く赦さ
ざるも
愛少しし

る婦に振り向きつゝ、熱情籠る語を以て「此の婦を見るか。我れ汝の家に入るに、汝は我が足に水を給へず、此の婦は涙に、我が足を濡し、首の髪をもて拭へり、汝は我に接吻せず、此の婦は我が此所に入りし時より我が足に口を接けて已まず、汝は我が首に膏を抹らず、此の婦は我が足に香膏を抹れり。是の故に我れ汝に言はん。此の婦の多くの罪は赦されたり、之に因りて其の愛も亦多きなり、赦さるゝこと少きものは其の愛も亦少し」と主人に宣ふた。

善を爲さ
人が爲す
悪を爲す
べきか

耶穌は此所に議論の爲めに、シモンを以て五十デナリの負債人、婦を以て五百デナリの負債人に例へて假りに罪の度に於てシモンが自ら認むる彼と婦との相違を其のまゝに採用せられたのであつた。唯だ自ら誇る正義を其のまゝに容赦しつゝ、憐な社會の排斥者の敬虔な態度と、傲慢なパリサイ人の冷酷な態度とを指摘して、之に應ずるに寛大なる所置を與らるゝに何の不思議があるかと問はれたのであつた。此れは議論として殊に此の主人の傲慢を挫かんが爲めに用

ゐられたのであるけれども、此れを押し詰むれば驚くべき結論に達するのである。若し赦さるゝ事少きものは愛も亦少しとせば、多く赦され、多く愛せんが爲めには、『善を來らせんが爲めに惡を作すは宜からずや』(羅三〇八)で、大罪を犯すに若かないであらうか。耶穌が斯くの如き思召で此れを仰せられたものとは信ずるを得ないのであつて、事實は議論の爲めのみ罪の程度に就いて彼と婦との間に雲泥の差ありと自ら容すシモンの意見を其のまゝに採用せられたものであつた。即ち或るとき、罪人に對する温かき態度の當然なるを示めさんとして、パリサイ人の主張を其のまゝ採用し、『康健なるものは醫者の助けを求めず』、又『正義者は悔改むる要なき』(太九〇十七路五〇三十七)を論ぜられたのと一般である。シモンが赦さるること少なきものと自ら認容したのけ彼は同僚の大部分に勝つた人物ながらも、尙ほパリサイ人の頑迷を免るゝを得ず、其の實際の地位を瞭かに意識せざるものであつた。眞の聖徒ならんか、其の眼前に神の赫灼たる至聖を望み、自らの罪深きを意識して、塵芥にも等

しきものなりと遜るのが、常態である。一日或る同信のものがアシジのフランシスに對し、怒りに乗じて罵詈譏諷——盜賊、殺人漢、泥醉者等——を極めた。フランシスは謙遜に、皆是れ事實に相違ないと告白したので、然しもの相手も驚駭して其の理由を尋ねると、彼は『天よりの恩寵を辱ふするに非ずんば、余は其れらに勝さる大罪をも犯したるに相違なし』と答へた。シモンにして若し其の心中の疾患を意識せば、自ら此の敗殘者と同様の罪人なるを告白すべき筈であつた。斯く耶穌が『赦さるゝこと少きものは愛も亦少し』と仰せられたのは、彼等の立脚地から立論せんとして、パリサイ人の意識を假りに容されたものであつた。絶対に其の真相を表はせば律法は『赦さるゝ事少しと考ふるものは愛も亦少し』と言ふのである。由來耶穌に對して忠誠を盡くすものは、自ら赦されたりと意識する處の如何に比例するのである。

罪ある
 婦人は
 何人

聖ルカの福音書の中に、此の秀麗なる物語を記されてゐるのであつて、彼が此の婦人の名の逸してゐる用意は周到であると言はねばならぬ。

彼女^{かれ}は初代の教會では有名な人物であつたに相違なく、特に記事を精撰するに注意した福音記者が之を知らない道理なく(路一〇)、彼は之を知つて尙ほ、此多く悔ひて多く赦されたる婦人の耻辱を故更に白日に洒すを厭ひ、之を省いたことは疑を容れない。此の婦とは何人であつたか其の秘密を洞察して之を發見するのは不可能であらうか。何故かギリシヤの師父は之を探索せしめずして満足し、唯だラテンの師父のみが之を試みて二様の人物を其れと推定してゐるのが不思議である。

マクダ
ラのマ
リヤ

第一は此の罪ある婦、即ち其の赦されたことの宏大なるが爲めに絶大の愛を献げたと言ふのは、マクダラのマリヤに相違ないと認めらるゝもので、此の思想は西部基督教國に一般に普及して、不朽の宗教的藝術や文學の基礎となつた。但し此れには正常な理由がある。マリヤは罪を犯した婦で、其の耻辱の中より救はれたるが爲め特に耶穌に愛を献げたことは疑ひない所である。彼女^{かれ}が第一に福音書に現はれた記事には「七つの惡鬼を逐出されたるマクダラのマリヤ」(路八)

と稱せられ、不道德は因惡鬼の魅入つたものと認められたもので、七つとは完全との意義を示めし、其の罪惡の夥しきを言つたものである。故に耶穌がマリヤの七つの惡鬼を逐ひ出されたと稱するのは、肉慾の奴隸であつたものを、此の不潔の惡鬼から救ひ出された意味である。マクダラは殷賑な都市でユダヤ教經典に由れば、此の種族からの貢物は數臺の貨車を以てエルサレムに送らるゝ三都市のうちの一つであつたと言ふ。然し同書に由れば、此の地は醜猥な名を以て著はれ、其の春賣婦の市たる理由を以て破壊せられたと傳へらるゝ。彼女^{かれ}は耶穌に謁見したとき此の所に住んでゐたが、此の醜猥な營業を營んだ其の耻かしい町の名を、永遠に傳ふる稱呼を冠せられたのであつた。昔に其れのみならず、聖ルカが彼女^{かれ}の耻辱を押し隠して此の罪なる婦と同人であることを少しも跡を留ないやうに務めてゐるに拘はらず、マクダラのマリヤの物語をパリサイ人の家の記事に續いて直ちに紹介してゐるのである。兎も角何れにしてもマリヤは、死も尙ほ辭せざる愛を献ぐるに至つたほどの

宏大な恩寵を主に受けたことを實驗してゐたのは確實である。

ベタニヤ
のマリヤ
と同人

聖アウガスチンは今一步進んだ推論を試みてゐる。彼は聖ヨハネが、ラザロの甦さるゝ物語の冒頭に「マリヤは曩に主に香膏を抹り、己の頭の髪を以て主の足を拭ひし人」(約十一〇二)と挿入してゐるの取つて、上叙の聖ルカの記事に見るパリサイ人の家の事件に照合せしめてゐるのである。若し此れが其の引照だとすれば此の二つ事實の同一人なるは確かである。然し其の議論も幾分不確實なるを認めねばならない。聖ヨハネは曩の香膏を抹つたことは自ら記録せず、聖ルカの記録を以て斯く引照したものと云ふを得やうけれども、尙ほ彼が次の章に傳ふるベタニヤの村に於て香膏を抹つたことを引照したものと見ることも出来る譯で、其の方が一層當を得てゐるのである。而して後の事實を前以て引照したのは其の事實が一般に知れ渡つてゐたからである。

此れが若し全體の證據となるべくば、罪ある婦とベタニヤのマリヤと

パ
リ
サイ
人
の
家
の
再
現
光
景

同一人であつたと言ふ議論が頗る不確實となるのである。然し聖ヨハネの記事は到底疑ふの餘地なきほど、微細に且つ確實なものである。

耶穌が食卓に着せらるゝとき、マリヤは價高きナルゲを採り來て聖足に滌ぎ、頭の髪を以て之を拭つたとある(約十二〇三)。此れ二重に驚くべき事實であつて、何故彼女は其の聖頭に非ずして聖足に膏を滌ぎ、且つ其の髪で之を拭はねばならなかつたであらうか。此の行爲は單に主に對する敬慕恭順の意を献ぐるのみに非ずして、彼のパリサイ人の家に於て憂悶に泣ける彼女が雨の如く涙を其の聖足に滌ぎ、捌ける髪を以て、之を拭つた過去を回想して感激措く能はざりし爲めではあるまいか。彼女は當時の光景を夢にも忘るゝを得ず、此の感謝の記憶尙ほ新たなるものあるを耶穌に示さんとして、再び斯くの如き行動を爲したのであらう。耶穌の賞揚せらるゝ如く是れ實に「善事を行」(太廿六〇十)へるものであつて、一同のものには其の意義が明かになかつたけれども、耶穌には瞭然たるものがあつて之を嘉納せられたのであつ

た。

若しマ
グダラの
マリヤに
非

此れベタニヤのマリヤとパリサイ人の家の罪ある婦が同一である有力な力の、然り、不可抗の證據ではあるまいか。更らに之に劣らず有力な證據が此れとマグダラのマリヤの同一であることを示めすのである。若しベタニヤのマリヤにしてマグダラのマリヤと別人なりとせば、彼女は十字架の下にも墓場にも來なかつたものである。マグダラのマリヤは妨害をも暴力をも意とせず、カルザアリイ山上まで耶穌イエスに隨從し、潰つぶぶるゝばかりの胸を押へつゝ悲劇の終るまで其所に佇み、ヨセフの園まで耶穌イエスの傷ける屍を護衛し、其の靜かに納めらるゝを目撃した大膽な婦人たちの中に居るのである(太廿七〇五十六。可十五〇四十)。且つ復活の晨に「朝未た味さうち」に墓地に來つて第一に復活の主の幻影に接したのも彼女であつた(太廿七〇十五〇四十七。可十一十八)。然るにベタニヤのマリヤの事は更に記されないのである。僅に橄欖の阪を隔つるのみの近距離に住ひつゝ彼女かれは斯くも敬慕

ベタニヤ
のマリヤ
の非
を見す

し、斯くも愛せられた主の最期を意に介せず安然と家に留まるを得たであらうか。

共觀福音書記者の沈黙

更らに一層此の二様の人物が同一であることを確むべきは、不思議にも共觀福音書の記者たちが、ベタニヤの家族に關して沈黙を守つてゐることである。唯だ一回聖ルカのみが記録してゐるが、彼は確かに彼等の身の上を隠すに務めてゐる事が明かである(路十〇廿八。一四十二)。彼はマルタとマリヤを擧げてゐるけれども、ラザロに就いては少しも記さず、又何處に此の姉妹の家があつたかも載せてゐないのである。聖マタイも聖マコも亦等しく之を隠匿してゐるのであつて、彼等は何れもベタニヤに於ける香膏を抹つた物語を載せてゐるけれども、唯だ癩病人シモンの家で起つたことで、「或る婦」が「善事を行な」(太廿六〇六、七。可十四〇三)つたとのみ記してゐる。其のラザロも客のうちに混じ、マルタは給仕を爲し、マリヤが彼等の言ふ婦であつたことを説明するものは聖ヨハネである(約十二〇。一三)。此所に之を隠匿したことは特に注意すべきであつて、之を充分に研究すれば、ラザロの物語を以て前三

福音記者の知らない、ヨハネの描いた小説であると言ふ近代の議論に好個の駁撃を加ふるに足るものである。彼等は勿論之を知つてゐたけれども、其の美はしき家庭から幔幕を除いて其の隱事を露ばくのを悲しんだものである。恐らく彼等はラザロの安全を慮るのが其の重なる目的であつたらう。蓋し有司たちは耶穌に對する信仰を民衆の間に厚からしむる事實としてザロの甦りを一方ならず懸念する所から、之を殺す決心を固めたのであつた。故に此の福音の物語を綴るに當つて、敵をして深く之を追求せしめない用意に彼に關する記事を省いたものである。然かも此れが其の最大の動機ではなかつた。更らに深い意味がある。即ちマリヤは過去に罪を重ねたものであつたので、此の愛すべき家庭に對する温かき同情から此の物語を葬つたものである——耶穌が遙か北部のマグダラの町に於て如何なる罪惡の間に彼女を索め、之を赦して、其のベダニヤに於ける家庭を潔められたかを語るを憚つたものである。是れを明白に記せば、忽ちラザロ並に其の姉たちの災害となり苦痛となる。

筈であつた。然るに年又年は過ぎて聖ヨハネが其の福音書を記すに當つては、此等の事實も時と共に「噂も消えて鎮まれり」で此の老年福音記者は何の係累もなく自由いえずに唯だ耶穌の恩寵のみを發表する材料に用ふるを得たのである。然かも尙ほマリヤを思ふては其の眼前まのあたりに、神聖な一女性を描くのみのみの目的であつたので、其の過去の罪惡に就いては筆を控へたものである。

此の符合
に對する
近代の
嫌疑の

此の罪ある婦とマグダラのマリヤと同一人であつたと言ふ事實は、引いて今日ベダニヤのマリヤに迷惑至極となるのであると言ふ。或る方面では是れは根據なき事實であると主張せられ、又他の方面では、主に斯くまで接近し、斯くまで愛撫せられたと思はるゝ婦人が曾つて娼婦であつたと言ふことは基督者の感覺に忍び難き侮辱を加ふるものと考ふものもある。然し後者の議論は之に加擔すべからざるのみならず、大いに其の不心得を叱斥すべきものである。蓋し斯くの如きは古へのパリサイ人の精神の復興である。畢竟シモンと共に「此の人若し

預言者ならば、其の捫りしものは誰なるか、又如何なる婦なるかを知らん、此の婦は悪行を爲せるものなり」と呶やくものである。眞の基督者ならんか、衷心より、正義者を招く爲めに非ず、罪ある人を招かんが爲めに來り給へる救主の赫奕たる實例として、斯くまで奈落に墜ちたるものの、斯くまで高遠の域に進めるを信じて歡喜すべき筈である。其の信仰に溢れ、喜んで、磽地に活ける水の泉湧けるが如しと、美はしき讚美を歌へる中世紀の聖徒には正に斯く思はれたのであつた。クライアヴァクスクレイヴァクスの聖ペルナルドほどに耶穌を熱烈に愛慕し至誠を献げて禮拜したものはあるまい。然るに彼はバリサイ人の家に於て耶穌の聖足に熱涙を雨の如くに濺ぎたる娼婦はベタニヤに於て主に香膏を奉れるラザロの姉妹に外ならず、又墓地に乳香を齎らせるものはマグダラのマリヤたる同人に外ならざるは拒むべからざるのみならず、靈魂の雀躍する事實なりと主張したのであつた。

第貳拾五章

再びガラリヤ傳道

『所得に非らず、其の失へる所、

其の飲める酒に非らず、濺ぎ出せる酒を以つて汝の生涯を計量せよ、

蓋し愛の能力は愛の犠牲のうちに宿り、

最も多く苦しむものこそ最も多く與ふべきものを有する所以なればなり』

エツチ・イ、エツチ・キンア

(路八〇一―三、太九〇三十五、可六〇六、太十三〇五十四―八、可六〇一―六、路四〇十
 六―三十、太九〇三十六―、十〇十六、廿四―四十二、可六〇七―十三、路九〇一―五
 十〇一―十二、六〇四十、十二〇二―九、五十一―三、十七〇三十三、路九〇六)

傳道に
 従へる
 婦人

耶穌は其の計畫の如くマグダラよりガラリヤ巡遊の途に上られたが、十二使徒のみならず、耶穌の慈愛溢るゝ温情を實驗し、感謝の念已み難き婦人の一團が之に隨伴した。マグダラのマリヤも其の一人で、彼女は其の積罪の町

を見棄て、耶穌イエスの贖ひの恩寵を實證せんが爲めに其教主に隨從したのであつた。ヘロデの大臣クウザの妻ヨハンナも亦其の一人で、若しクウザが、耶穌イエスの傳道の初期に其の子の病を癒された大臣と同一人であるとの説が事實であるならば、彼女が景慕の情を献げて耶穌イエスに奉侍したのは不思議ではない(約四〇四十七)。外にスザンナと言ふ婦人もゐたが、其の名前と信仰とを戴せらるゝのみで、如何なる人物かは明かでないけれども、何の説明も加へず此所に擧げらるゝより見て、初代教會に有名な婦人であつたことを知る可きである。此の三人は名を擧げてあるが、其の他に多くの婦人があつて、ヨハンナの如き地位の貴婦人も少なからず、耶穌イエス並に十二使徒の衣食の資を奉る貴き役を勤めたのであつた。

ナザレにて

斯くの如き隨伴者を従へて、耶穌イエスは内地に進みナザレの村を訪はれた。三十年間秘かに忍ばれた此の村、其の母並に家族の尙ほ定住せる故郷へ來られたのは、其の傳道開始以來始めてであるらしく、村民は一方ならず興味

を以て之を迎へた。名聲は既にナザレにも達して、郷民は皆其の村出身の偉人に對して好奇心を抱いて居た。然し耶穌イエスは今更ながら「預言は其の故郷に尊まれず」との諺の眞實なるを實驗せられたのであつた。彼等は耶穌イエスを知り、又其の家族と親しみ、其の肉に於て耶穌イエスに接近したことは却つて其の光榮を仰ぐを遮る幔幕となつた。耶穌イエスは彼等に祝福を與へんとせらるゝも、彼等は信仰を缺き、信仰の缺如せる所には、耶穌イエスの恩寵も漲り入るべき縁因よきがないのであつた。「耶穌イエス彼處にて患者に手を按つけ、唯だ數人を醫し、外、奇ふしぎなる事わざを爲すこと能はざりき。又彼等の信ぜざるを奇あやしみ」給ふのであつた。

會堂に於て説教

安息日に及んで耶穌イエスは會堂に赴かれ、習慣に従ひ、宰つかさどが會衆に對して談話を懲おとすするまゝに、喜んで其の機會を利用せられた。禮拜の順序に従へば、説教はアフタク即ち預言者の書を読んで後に爲すべき筈で、説教者は、聖書を読む間は之に敬意を表して起立し、後腰を卸して談話に移る事となつてゐ

た。聖書の朗讀には所定の日課があつたが、偶々安息日の部分はイザヤの書に當つたので、役員は其の卷を耶穌に渡したが、耶穌は其の卷を展べ、イザヤがバビロンの囚虜より赦さるるも遠きに非ざるを宣言せる第六十一章の一章句を出して『主の靈我れに在す故に、貧者に福音を宣べ傳へん事を我れに膏を沃ぎ任じ、心の傷める者を醫し、又囚人に釋さん事と、瞽者に見させんことを示めし、又壓制へらるるものを縦ち、主の禧ばしき年を宣べ播めんが爲めに我れを遣はせり』と其の恩寵に漲る語を読み、卷を納め、役員に渡して座に着せられ、聽衆の眼は等しく其の面に凝がるる間に耶穌は説教を始められた。『此の録されたる事は今日汝等の前に應ぜり』と説かれたとのみで、其の委細は記録せられないけれども、メツンヤたるを宣言して、其の職分の恩恵に滿つる所以を宣傳せられたことは瞭かである。是れ誠に驚くべき説教であつた。其の説教の名聲は既にナザレの郷民の耳にも達してゐたが、愈之を聽くに及んで、更らに一層其の有力なるに驚いたことを口々に告白した。『衆耶穌

を稱讚して其の口より出づる所の恩恵の言を奇み』たりとある。恩寵なる意義が此の説教を終始一貫せる基調であつた。

聽衆の困惑

彼等の靈魂は攪亂せられた、然かも彼等は聖靈の啓導する所に従はうとも爲ない。偏見は其の威を逞ふして、彼等の胸中に謀叛を起した。説

教の後には望むものあらば説教者に質問を試むるのが常であつた。不意に會堂は激昂した争論で喧囂を極めた。聽衆は耶穌に對して二重の困惑を抱いたのであつて、第一は斯くの如き宣言を爲す耶穌は果して何者であらうかと言ふにある。是れ木匠の子に非ずや、其の母はマリヤ、其の兄弟はヤコブ、ヨセ、シモン、ユダに非ずや、其の妹等は皆我等と偕に在るに非ずや、然るに此の人の凡て此等の事は何處より來りしや』耶穌が特殊の天稟を賦與せられ給ふたことを敢て論ずるものなく、唯だ嫉妬は人類の胸に燃え易く、彼等は耶穌が彼等に超越する權威を有せらるることを只管に憤つた。更らに又耶穌はナザレを輕侮せられたのではあるまいか。カペナウン

に赴いて、多くの不思議な恩寵を與へられたが、何故に其郷黨の間に定住し、自己の郷里を有名なものとなせられなかつたのであらうかと感うた。

此れに關する耶穌の說明

耶穌は彼等の質問と攻撃とに耳を傾けて、柔和に又懇切に之に答へられた。ナザレを侮蔑してカペナウンに移住せられたことを攻撃して

彼等は「醫者よ、汝自身を癒せ」との諺を引照したので、耶穌は同じく「我れ誠に汝等に告げん「預言者は其の郷里に貴まるゝことなし」と、諺を以て之に應ぜられたのである。耶穌が彼等の間に投ぜられて以來の彼等の態度は正しく此の諺の眞なるを彼等に示めし、且つ耶穌の行動の至當なるを教ふるものではあるまいか。此れに就きて既に先例があるのである。エリヤは其の饑饉に當り、イスラエルに多くの寡婦ありしに拘はらず、異教徒の市サレバタの寡婦に遣はされ(王上十七〇、一八以下)、エリヤは當時イスラエルの多くの癩病者に助を與へず、スリヤのナアマンのみを潔めたではないか(王下五)。古の預言者の行動は耶穌よりも甚だしきものがある。耶穌は唯

だユダヤ中の一都市より他の都市に移られたのみで、イスラエルを遺てゝ、異邦人を祝福せられたのではない。

會堂の紛擾

此れは寧ろ戯れの議論であつて、聽衆を鎮むべしと思ひきや、結果は反對の光景を現出した。排斥せらるゝ者に對する耶穌の特殊の厚意を傳へ聞き、又古の人の異教徒に恩恵を施したる説明を聞くに及んで彼等は激怒した。

忽ちにして會堂は騒亂の渦とあり、諺にも上つたナザレ人(約一〇四、十六參照)の本性を暴露し、起つて耶穌を村の端に放逐し、之を投落して殺す目的を以て山腹の斷崖の頂上

斷崖絶壁

へ曳いて來た。是れ實に言語同斷なる行動である。耶穌は此の人々の或る者とは同窓であつて、彼等と共に遊戯せらるゝに當つて幾次びか此の絶壁へ相携へて登られたのであるが、今や彼等は耶穌の周圍に咆哮しつゝ、残忍なる虐殺を行はんとして之を曳いて來たのであつた。然るに彼等が虐殺の意を遂げざるうちに、或る思慮が彼等の憤怒を寛めた。昔を思ふて彼等の手は自ら弛び、其の心に

惻隱の情が萌したのではあるまいか。或は將た耶穌の宣言と、其の堂々たる態度に逡巡したのであらうか。

『暴動の起るとき群衆は往々

狂妄の精神に同する暴徒となり

飛び来る木片、瓦礫は愈彼等の激昂を加ふ

然るに若し冷靜と才智とを有する堂々たる人物を見れば

彼等は鎮靜し耳を傾けて其の言ふ所を聴き

彼は其民心を支配し語を以て人々を黙せしむ』

其の時彼等は其の絶頂に達したが、其の憐憫の情に妨げられてゐる間に『耶穌彼等の中を徑行りて去りぬ』。

羊の牧
働きの

耶穌はナザレに於ける經驗を深く苦痛とせられた。己れの國に來られ

たけれども、其の民は之を受けないのである(約一)。此の頑迷にして、兇暴な人種に憤慨し、之を棄て、他に向はれても聊かも無理ではないが、慈愛に溢るゝ耶穌の聖意には未だ會つて斯くの如き思想は湧かなかつた。憤怒の情は深刻な慟哭に消え失せつゝ、人民に對しては聊かの不満をも抱かれず、唯だ彼等の教師たちに憤慨せられた。彼等はイスラエルの牧羊者である。彼等は羊の浮浪するまゝに棄て、顧みず、其の職分を等閑にしてゐるのである(結卅四)。眞の牧羊者の衷心は破るゝばかりで、『牧者なき羊の如く衆人惱み又流離になりし故に之を見て憫み給ふ』(民廿七)た。

使徒
職の分

此の憫むべき光景は雷に主の慟哭せらるゝ所のみならず、一層力を盡さるゝの刺戟となつた。僅少なる時間を以て此の擴大なる畑に勞作せらるゝことは耶穌の雙手のみを以ては到底不可能であつて、其の熟慮の上計畫せられたる如く、彼等と暫く別れんことを決心せられた。既に十二人に按手禮を施して、單に其の後繼者たるのみならず、同勞者たらしめんとして、其の事業を彼等に依托

するに於ける教育を充分に施されたのである。今各方面に眼を縦つて重要な時機到達せるを煩ひつゝ、彼等を顧みて『收穫は多く工人は少し、故に其の稼主に工人を收穫場に送らんことを願ふべし』と仰せられた。此れ單に訓誨に非らず、古の預言者に『我れ誰を遣はさん、誰か我等の爲めに往くべきか』(賽六〇)と神の仰せられたると一般、寧ろ其の懇請の語であつて、耶穌は十二人の顔を凝視しつゝ、彼等の唇より古の預言者の如く『我れ此所にあり、我れを遣はし給へ』との應答を受けんことを望まれたのであつた。彼等自ら其の恩命に馳參せずるの覺悟なくして、焉んぞ工人を祈ることを得やうか。彼等の如く耶穌と俱にあり、其の聖意を目撃し、其の教訓を辱ふしたものに非ずして何人か之に適するものがあらうか。然かも彼等は其の主の胸中を委しく悟りながらも尙ほ同僚の何人か、卒先して奮發するのを互に待つゝ黙然として應じなかつた。耶穌は之が爲めに躊躇せられなかつた。如何に彼等が志を有せずとも、既に使命は彼等に任せられて居る。彼等が收穫に馳せ行かず

とも、既に彼等を逐はずんば已まれないのである。耶穌は彼等を召して、其の命を與へ、二人を一組として其の聖名に由りて福音を宣傳し、又病を癒しつゝガリラヤ全土に巡回せしめんが爲めに發足せしめられた。

主の 訓誨

彼等の各方面に赴くに先立つて、耶穌は之に命令と獎勵の辭とを與へ、第一に彼等の職分を制定せられた。此の時彼等の傳道はイスラエル

傳道 の 範圍

國民にのみ限るべきもので、北方並に東方には異邦の國あり、南にはサマリヤの民があるけれども、彼等は唯だガリラヤのみを巡遊せねばならぬ。『異邦の途に往く勿れ、又サマリヤ人の村にも入る勿れ、唯だイスラエルの家の迷へる羊に往け』。斯くの如き制限の必要であつたことは甚だ著しい事實であつて、ユダヤ人として未だ會つて異邦人或はサマリヤ人に説教するが如きは夢にだも思はざる所で、此等の外國に對する同情より耶穌自ら其の例を示めざるゝに非ずんば、十二使徒の心に斯くの如き思想が起るべくも無かつた。然かも全世界に福音を宣傳

すべき時は未だ到達せざるが故に、彼等は唯だユダヤ人の間に此の時の傳道を止めねばならなかつた。

彼等の準備

次に彼等の準備に就いては、杖の外携ふる勿れと誡められた。蓋し此れが彼等にとつて甚だ重要であつて、旅程は遠く、彼等は常に疲勞し、脚力の盡きる事あるべきが爲めであつた。其の他にはパンも、旅囊も、金錢も必要ではない。靴のまゝ出發して、一般の旅客の如く裏衣を、其の着更のため又冷氣の爲め重ねる用意に携ふる要はない。斯く不用意のまゝに彼等は出發せねばならぬ。蓋し此れには二様の理由があつた。一つは急な旅行なるが故に準備のため又荷物の運搬のために時日の遷延、否な東洋風の面倒な挨拶を途上に逢ふ人と相交はすに費やす暇をすら許さないのであつた(王下四〇廿九)。又一つには彼等は其の事業に對する報酬として衣食を索むるを許されてゐるからであつた。「工人の其の食物を得るは宜べなり」と仰せられた。恐らく是れには更らに深淵な意義(哥前九〇十四參照)があるのであつて、

神殿の山上に踏み入るものは何人に限らず、杖や、靴や、財布やを携へ、汚れた足を以ては許されざる所で、耶穌は其の事業の神聖な事を意識せしめんがために此の規定を此所に適用せられたものであらう。彼等の赴く所は、宛然神聖な個所と同一であらう。

彼等の饗應

彼等は貧しき様其のまゝに旅行するを要した。然かも決して乞食を爲すのではない。寧ろ彼等は此れを受けたるものゝ到底償却する能はざるほどの利潤を齎らすものであつて、彼等を饗應するものは必らず豊富な報酬を受くべきであつた(太十一四十一)。故に彼等は其の赴く市に於て決して施與を請ふを要せぬ。唯だ其の家に彼等を招くの價値ある人物を發見し、一次び之を擇まば、其の市を去る時まで其の家に留まらば足るのであつた「家より家に移る勿れ」と耶穌は戒められた。耶穌は彼等が社交的な事に、其の傳道に獻ぐべき貴重な時間を消費するのを吝まれたのであらうか。或は又他の贅澤な家へ移る爲めに其の家を出る事が主人を遺

憾に感ぜしむべきを戒められたのであらうか。且つ彼等は其の家に在る間は、柔和に又思慮深く『其の前に供へらるゝものを食ひ』其の家の習慣に悉く服して過誤なきを心掛けねばならぬ。然れども時に彼等を冷遇するものに會はゞ、或は又其の使命を輕んずるものあらば嚴かに之を戒飾して、其の地を去るべきであつた。『若し邑に入らんに接くるものなくば衢に出て曰へ「我等に沾たる汝が邑の塵は汝等に對て拂はん、然れども神の國は近けるを知れ」と、我れ汝等に告げん、審判の日到らばソドム、ゴモラの刑罰は此の邑よりも却つて易かるべし』。

各種の道害

ナザレに於ける事件は畢竟、十二使徒の傳道の間、彼等の遭遇すべき事件の前兆であつた。『我れ汝等を遣はすは、羊を狼の中に入るゝが如し、故に「蛇の如く智く、鴿の如く馴良しかれ』。此れ一方に怠慢を誠むると同時に一方風潮に卷込まるゝを誠むる諺である。彼等は迫害を覺悟し、怖れなく之に面して、怯懦に、沈黙せずして公然其の主を紹介し、彼等に托せらるゝ使命を危険を

冒しつゝ宣傳せねばならぬ。『我れ幽暗に於て汝等に告げしことを光明に述べよ、耳をつけて聽きしことを屋上に宣ひ播めよ』。其の苦痛の如何にもあれ、彼等は溢るゝ慰藉を有するのであつた。彼等の主は既に自ら其の道程を経て居らるゝ。『弟子は其の師の如く僕は其の主の如くならば足りぬべし。若し人主を呼びてベルゼブルと言はば況して其の家のものをや』(可三〇廿二、太十二〇廿四)。又其の敵は彼等の肉を殺すことを得べしと雖も、靈魂を殺す事は出来ぬ。卑怯のため、或は不信の爲めに苦しみを避け、或は之を輕減せんことを望まば、是れ己れを惡魔に交付するものである。『懼るゝ勿れ、唯だ懼れよと我が汝に誡めたるものを懼れよ。唯だ汝等靈魂と身體とを地獄に滅し得るものを懼れよ。然り我れ汝に告げん、是れを懼れよ』と耶穌は言はれた。所有困苦に際し彼等には神の賢明にして慈愛に富む攝理が無いであらうか。彼等は神の聖手のうちにあり、神は彼等を保護せらるゝのである。僅々一錢を以て一番を購はれ二錢を購はゞ一匹の景物を得べき雀の如き見る影もなき小さな動物すら尙ほ

神は照覽し給ふ。『五羽の雀は二錢にて賣るに非らずや。然るに汝の父の許しなくば其の一羽（即ち添へ物として無代價で取引せらるゝ）も地に墜つる事なし。汝等の頭の髪又皆數へらる。故に懼るゝ勿れ、汝等は多くの雀よりも優れり』。

主の

要求

耶穌は使徒たちの眷戀たる妄想を破るに如何に努力せられたかが明白である。其の召されたるは奮闘、苦痛、犠牲の爲めであつて、此の事實を認めて、彼等が其の苛責に潔く面し、之に突進する勇氣ありや否やを試みんことを望まれた。『地に不平を出さん爲めに我れ來れりと意ふ勿れ、秦平を出さんと非ず、刃を出さん爲めに來れり。夫れ我が來るは人を其の父に背かせ、女を其の母に背かせ、媳を其の姑に背かせんが爲めなり。人の敵は其の家の者なるべし』と。更らに進んで人の愛情の眞實にして神聖なるものを指摘し、神の爲めに非ず、天國の爲めに非ず、唯だ耶穌自らの爲め、至誠を献ぐべきを宣言して『我れよりも父母を愛しむものは我れに協はざるものなり、我れよりも子女を愛しむものは我れに協は

ざるものなり』と仰せられた。否更らに一層進んで、耶穌のためには最低最陋の苦痛に甘じ、極度の侮辱をも忍ばざる可らざるを宣言せられた。當時に於て『十字架を負ふ』と言ふのは現今の如く宗教的な文辭となり、其の意義を輕減して往々感傷的な苦痛に適用する比喻ではなく、峻烈にして殘忍の光景を其のまゝの語であつた。十字架の刑は極惡人に課する悲痛の罪であつた。十二使徒等は斯くの如き重罪犯人の、磔刑の場所に其の十字架を負ひつゝ赴いて、其の生命の終るまで憂悶、號叫する耻辱と苦惱とを實見することが往々あつた。耶穌は此等、社會の敵の受くる所が己の運命なるを自ら知られ、其の使徒にも亦之を受くるの覺悟なかるべからざるを示めして『其の十字架を任て、我に従はざるものは、我れに協はざるものなり』と仰せられたのである。ソクラテス、或はアレキサンダアの口より斯くの如き宣言が發表せられたならば、狂氣の沙汰と受取られて、唯だ嘲笑を招くに過ぎなかつたであらう。然るに耶穌は絶えず斯く宣言せられ、又最も親しく之に接近して、之を

最も深く了解したものは、何人も當然なりと認識したのであつた。

使徒の
應答

彼等の高尚な本能に訴へて主は訓誨せられたので使徒等の心は爲めに燃えた。是れ誠に武士道的英雄の要求である。此の戦闘を控ふる前夜に、軍隊を鼓舞する將軍の態度を以て『其の生命を得るものは之を失ひ、我が爲めに生命を失ふものは之を得べし』と誡められた。戰場に於て如何なる艱難も降らば降れ、彼等は不朽の生命いのちを獲得すべきものである。名譽の生命いのちを獲得せんよりは、寧ろ榮光の死を遂ぐるに若かない。アシジのフラシスは、ボルチアンクラの禮拜堂に於て、司祭が此の使徒に授けらるゝ訓誨を讀むのを聞いて、即刻、杖も、行李も、財布も、靴も擲つて其の高遠な職分に、投じたのであつた。使徒は主の口づから温かにして燃ゆる如き此の訓誨を受けては勇んで之に應答し奉つたに疑ひない。彼等は耶穌イエスを離れ、婦人等に告別し、二人を一組として各方面に『福音を傳へ、病を癒やさんが爲めに赴けり』。

第貳拾六章

洗禮者の末期の光景

『今日までも、婦の産める人のうち』

☉ハネより悲慘に又偉大なるもの非ず。

明けゆく空に紅染むる聖手の業わざなる

孤峰の如くに☉ハネは輝けり』

マイヤアス

(太十一〇一、路七〇十一―七、太十二〇二―九、路七〇十八―廿五、太十四〇六―十一、可六〇廿一―八)

傳道に關する記
録なし

使徒たちは各方面に向ひ、耶穌は忠信なる婦人を伴つて其の志す方へ赴かれた。彼等の行動が記録の價値がなかつた譯ではないが、福音記者は十二使徒の行動を記すに非ずして、主の行動を記すのが其の目的であつた。爲めに、彼等に就いて何の記録も遺さないものであつた。若し彼等にして耶穌イエスがガリラヤを巡

遊して如何なる教を垂れ又如何なる説教をせられたかを知つたならば、其れを描く筈であつたらうけれども、彼等は之を知るを得なかつた。使徒たちは自己の職務に忙がはしく彼等の見聞した所のみが其の口授として傳へられたため、此の間の事は不明のままに差し置いたのである。

ナイン
の奇蹟

唯だ聖ルカの探索に由り、此の埋没した中より貴い一断片が保留せられた。若しヨハンナが、一年前、死より甦らしめられた小兒の母であつたとすれば、此の報告を聖ルカに齎らしたものは、此の婦人であつたらう。自己の經驗に好く應ずる所から彼女は深く感じたものであらうか。其の傳道の間、耶穌はガラヤの南に來り、古へのエンドルとシユネムとの間に當り、ナザレの東南七哩のナインと言ふ町に近づかれた。其の左右には婦人の團體のみならず、弟子たちの一團も隨伴したが、此れは近く得られた回心者であつて、好奇心から従つて來た群衆も夥しかつたであらう。其の町の東一哩に古い墓地があつて、耶穌が其の傍近くに來

られたときに、慟哭しつゝ進み來る行列に邂逅せられた。此れは一少年の葬式で、寡婦の獨子が死んだものであつて、ユダヤ人の習慣に由り、氣も狂はんばかりの母は、行列の首に歩む婦人の團體の中に目立つて見えた。同情深き慟哭者の一大團體が続いて行く。耶穌の憐憫の情は此の光景に漲り溢れ、慟哭せる母に向つて「哭く勿れ」と仰せられ、蓋なき棺に手を按けて「少き者、起きよ」と命ぜらるゝや、少年は起き出て言を曰ひ始めた。傍觀したものは一同畏懼の念に撃たれ、或る者は此所より程近きシユネムの村に於けるエリヤの奇蹟を偲びつゝ、「大いなる預言者我等のうちに興る」(王下四〇)と言ひ、又或る者は「神其の民を眷顧給へり」と言つた。

洗禮者
ヨハネ
の使者

耶穌が尙ほ其の傳道に従事せらるゝ所に二人の旅人が來て會見を願ひ出た。彼等は主の傳道の當初の頃ヘロデ・アンテパスに拘引せられ、爾來マカエラスの要塞に監禁せられて居るバプテスマのヨハネの弟子であつた。此れ誠に焦慮すべき時節であつて、此の思想不定の暴君の心は反對の勢力に壓せられ、

憤怒の情に馳られて一次びは之を斬罪に處せんと欲したけれども如何に群衆が此の預言者を尊崇せるかを知り、萬一彼等の偶像を破壊せば、必然暴動の起るべきを怖れた。故に彼はヨハネを拘引のまゝに差し置いたが、今や尙ほ甚だしき恐怖が彼を襲つて來たのであつた。彼は屢囚人を引見したが、此の孤影倚る所なきに拘はらず、尙ほ威儀冒すべからざる大膽な此の人物の前には、其の積罪に滿つる靈魂は戦慄した。「彼大いに困惑し且つ喜びて彼に聽くことをせり」。此れ太守の生命に關する危機迫れる緊急の時であつた。其の良心は感動して其の指示する所に従はんことを迫り、聖靈は頻りに要求するに拘はらず、悲しむべし、彼の過去の罪惡のために彼は足械を箝められたものであつた。即ちヘロデヤは彼を後ろに曳き倒した。彼女のためにヘロデヤは大罪を犯し、之を悔改せんとするに當つて、彼が會つて鍛鍊した其の足械に由つて今は束縛せられてゐるのであつた。洗禮者が彼女の不潔な結婚を彈劾した事を怨んで彼女は惡虐無道の毒婦の本性を表はし、彼を死に處せずんば已ま

ざる強請を爲すに至つた。此方へ曳かれ、彼方へ押されて、太守は囚人を殺すことを敢てせず、又之を解放することも出來ず、唯だ憂悶のうちに此の年月を過したのであつた。彼は少からざる厚意を傾けて、出來得る限り囚人を居心地好からしめ、弟子をして自由に彼に接近するを得しめた(路七〇一〇二)。

耶穌に對するヨハネの疑

彼等は世間の事情を一々にヨハネに報告し、特にヨハネがヨルダン對岸のベタニヤに於て群衆に對しメツシヤなりと發表した耶穌の行動に就いては、殊に報道を怠らなかつた。ヨハネは『メツシヤの事業』の報告を熱心な注意を傾けて聞くのであつたが、時日の遷るに従つて疑惑が其の心に生じた。彼は耶穌が果して眞にメツシヤなりやを疑ひ、明かに之を宣言せられんことを要求せしめんがため二人の弟子を使者として送るに至つた。

其の理由

何故に彼は疑を起したのであらうか。何ものが彼の確固たる自信を搖がすに至つたのであらうか。彼は絶望したのであらうと一般に想像せら

れてゐる。而して耶穌は牢獄に在るがまゝに棄て置いて、彼を救ふ手段を更らに講ぜられざるのみならず、同情と奨勵との使者をすら曾つて送らず、ガリラヤのうちにも忙しく活動せられたからであると言ふ。然し此れは根據の無い議論であると同時に此の大膽な預言者の價値を刪減するものである。若し彼にして絶望したものとすれば、如何ぞ之を耶穌に訴へやう。却つてアンテバスの前に我を折つて、彼と妥協したに相違はない。更らに又ヨハネは絶望するやうな人物ではない。彼は英雄の資性を有し、其の生命よりも重なる事實の進行するのを見ては敢て自己一身の如何を顧みざる底の人物である(約三〇廿)。奥床しくも自己を棄て、彼は歩を傍に轉し、其の領域を耶穌に献げたのであつて、彼は寧ろマカエラスの暗黒な牢獄に朽つるに満足し、天國の既に實現する事をのみ熱望したに相違はないのである。

彼のメ
ツシヤ
の觀

彼をして困惑せしめたのは即ち是れである。即ち彼には天の王國が實現の途にあるものと思はれなかつたからであつた。彼は耶穌の行動を聽

いて、判斷に苦しみ、此れ果して『メツシヤの事業なりや』否なやを疑つたのであつた。彼は一般のユダヤ人と等しくメツシヤに對する理想に誤れる所あり、耶穌の行動の彼の理想に沿はざるを見て、其のメツシヤなりやを疑つたのであつた。勿論當時のユダヤ人が普通に懷抱せるメツシヤの理想とは相異なるものがあつた。當時のユダヤ人は異教の國を粉碎して、新たにイスラエルを自由の國家たらしむる征服者、ダビデ王統の一君王を待望し、耶穌が王冠を戴かれず、背後に天軍を率ゐられざるが故に之をメツシヤと信じ得ざるものであつた。ヨハネは是れに勝る高尚な理想を有してゐたのであつて、事實二つの觀念が幾分矛盾しつゝ彼の心頭に來往してゐたのであつた。彼は一方に「手には箕を持ちて其の禾場を淨め、麥は斂めて其の倉に入れ、糠は熄えざる火にて燬くべく」(太三〇十二、路三〇十七)、「斧を樹の根に置かる、故に凡て善果を結ばざる樹は伐られて火に投げ入れらるゝ」改革者の行動を實驗せらるべきメツシヤを望み、又一方にはイザヤ書第五十三章に描かるゝ如く、單に殉教者た

るのみならず、犠牲の献物たる贖主もがひなし、『世の罪を負ふ神の羔を觀よ』(約一〇廿九)と苦難のメツシヤを望んだのであつた。彼は耶穌いえずの行動を聽いて、其の偉大にして不可思議なるを認識したけれども、此れを以て『メツシヤの事業』なりと思考する事を得なかつた。耶穌いえずは其の孰れの理想をも實現せられず、改革者にも非ず、又苦難の主でもない。『彼は競ふ事なく、喧ぶことなし、人街ぢやたに於て其の聲を聽くことなく』(太十二、何處に箕あり斧があらうか。又當時は主の人望赫奕たるの日であつて、群衆の偶像り、時代の中心人物であつた。

故にヨハネは惑つた。彼にして若し時代の腐敗に對して十字軍を堂々組織せらるゝと聽かば、彼は雀躍して『見よ、箕と斧とを携ふるメツシヤを』と叫んだことであらう。或は又耶穌いえずが彼の如く拘引せられ、牢獄に投ぜられ、迫害に困苦艱難せらるゝと聽かば、彼は又『觀よ、メツシヤを！屠者に曳かる羔の如きメツシヤを』と満足したことであらう。然るに彼は斯くの如きものを聞かなかつた。耶穌いえずは改革者

でもなく、犠牲でもなかつた。是れ果してメツシヤたるを得やうか。

其の
性急

ヨハネの惑ひは理想の誤謬と言はんよりは寧ろ其の性急なる點にあつた。其の理想は意義に於ては眞理であつた。耶穌いえずは改革者であつて萬事を改新せらるために降られた。又苦難者であつて十字架は其の苦惱であつた。然し時まだ到らずして之が實現しないものを、ヨハネは結局を見んと欲するに急なるものであつた。彼は耶穌いえずのメツシヤたるを否認せず、又否認し能はざるものであつた。唯だ之を證するに足るべき多くの材料があつたけれども尙ほ彼が中心事實と思考するものが缺如してゐたのであつた。彼は『然り』か將た『否』かの間に彷徨し、遂に耶穌いえずに疑問を供提して、其の斷定を請ふの決心を爲すほどに耶穌いえずを信任し、又之を信仰せんと焦慮したのであつた。

主の
應答

彼の使者は耶穌いえずを索めて彼等の師の質義を提出した。『來るべきものは汝なるか、又我等他に待つべきか』と。主は恰かも病を癒されんとして

群り集る民衆に取巻かれて、答をせらるゝ暇もなく使者の面前に於て尙ほ其の恩恵に満つる事業を繼續して居られた。聽て彼等に向つて、「汝等が聞く所、見る所の事をヨハネに往きて告げよ、瞽者は見、跛者は歩み、癩病人は潔り、聾者は聞き、死たる者は復活され、貧者は福音を聞かせらる、凡そ我が爲めに躓かざるものは福なり」と仰せられた。此れ峻嚴にして殆んど無情の答へのやうに思はるゝ。一語も同情の温まりなく、牢獄内にあつて困憊せる大膽な靈魂を慰撫すべき片言雙句もなく、又彼の英雄的事業の最高の活動が最期の運命を齎さるるかを問はるゝこともなかつた。實に残酷な答へのやうに思はるゝけれども、事實に於て耶穌は温かに又賢く言ひ傳へしめられたものであつた。耶穌にして若し理由を言はずして「然り、我れはメツシヤなり」と答へらるれば、洗禮者は其の裁定せらるゝ所を其のまゝに、然かも盲目的に受けて、其の惑も亦其のまゝに遺つたことであらう。而して尙ほ屢五里霧中に迷つたことであらう。耶穌は賢明な手段を執つて、其の使者をして親し

く傾聽し、又目撃せる所を其の師に齎らさしめ、以て彼の判断に委ねられたのである。證據は顯然たるもので、ヨハネ自らが見んと欲したる證據と似かぬものであつて、彼の期待した所は過ちなるを、眞摯にして、私なく、雅量に富み、自己の意見を反省するに吝ならざる彼が悟らば、喜んで之を棄つべきを耶穌は信任せられたのであつた。

ヨハネに對する
耶穌の讚歎

使者の其の許を辭するや、耶穌はヨハネに對して燦爛たる讚嘆の辭を發せられた。其の左右に佇む人々の胸中を讀んで、彼等がヨハネを定見なき卑法者と考へてゐるのを知られた。一次び確信した彼の信仰が搖らいで、其の災害のために精神の萎微したものと彼等は判断したのであつた。耶穌は、彼等がヨルダンの對岸に蟄集し、靈に充つる此の預言者の熱辯に競い聽いた當時の偉大な光景を思ひ起して、彼等の思慮の謂れなきを攻撃し、又暴露せしめられた。此の光景を記憶せば、ヨハネを以て定見なき卑法者と思ふことは出来ない。「汝等何を

見んとて野に出でしや、風に動かさるゝ葦なるか』。然り。死罪に定められた此の峻烈な預言者が如何ぞ無定見と言はれやう、動搖して居ると言はれやう。『然らば汝等何を見んとて出でしや、柔かき衣服を着たる人なるか、柔かき衣服を着たるものは王の宮に在り』。ヨハネにして若し災害に屈する怯懦なる臆病者ならしめば、彼は斯くの如き峻嚴なる制慾的の生活を送らずして好言令色の廷臣となつてゐたことであらう。『然らば何を見んとて出しや、預言者なるか。然り我れ汝等に告げん彼は預言者よりも卓越たるものなり、夫れ汝に先ちて道を備ふる我が使者を我れ汝の前に遣らん』(拉三)と録されたるは即ち是れなり。ヨハネは實に自ら宣言したる如くメツシヤの先驅者にして、來つて萬事を整ふべきユダヤ人の待望せるエリヤであつた。此れほど偉大な人物は未だ曾つて世に存した例がなかつた。

ヨハネ
の範圍

然かも尙ほヨハネには嚴重な制限を加へられた。彼はメツシヤの王國を誤解してゐるのであつた。『誠に汝等に告げん、婦の生みたるものう

ち未だバプテスマのヨハネより大いなるもの起らざりき、然れど天國の最小きものも彼より大いなるなり』ヨハネはメツシヤを以て嚴格なる改革家と爲し、改良せられた新たな時代の實現を只管に期待したのであつた。彼は舊い秩序を破壊し、神殿、會堂を棄て、激越なる彈劾を有司たちに加へ、ゼロテの黨に類する精神を鼓吹して、全地に焰を點けた。民衆は暴力と改革との手段に訴へて天の王國の建設を計畫し、恰かも軍隊の市街に狼籍を壇まゝにし、兇暴貪婪の手を以て鹵獲物を略奪するものと一般なりと考へた。『律法と預言者はヨハネまでなり。其の後神の國は宣べ傳へらる、皆用力て之に入らんと爲るなり』と耶穌は仰せらるゝ。耶穌は古への信仰の價値を認容して、其の完全なる啓示と天の王國の靈的狀態の準備として、此の精神、此等の手段に深玄な意義を與へて觀察せられたのであつた。其の傳道の當初に、『是の故に人若し誠めの至微き一つを壞り、又其の如く人に教へなば、天國に於て至微き者と謂はれん』(太五〇)と教へられたとき、其の眼を洗禮者ヨハネに擬せられたので

あつたが、今更らに一層力を籠めて「然れど天國の最小き者も彼よりは大きいなるなり」と宣言せられた。

其の時代の
不合理の

主の目的とせらるゝ所はヨハネを輕侮せんが爲めに非ず、其の聽衆をして彼等の不合理なるを意識せしめんが爲めであつた。神は彼等を捕へんとして初めて一つの手段を構ぜられたが、彼等が尙ほ頑として動かざるを見て、聖クリストムの所謂、獵師が各方面より一舉にして其の獲物を捕ふる如き他の手段を更らに用ひんと決心せられた。第一にヨハネを起されたが、彼の嚴格なることに彼等は嫌焉たるものがあつた。故に耶穌が降臨せられた。耶穌は荒野の隱遁者に非ず、恩寵裕かな彼等の友人として彼等の間に交り、其の招かるゝや、婚姻の席にも宴會の筵にも列せられた。然かも彼等は尙ほ之に嫌らないのであつた。ヨハネは峻嚴に過ぎ、耶穌は又懇切に過ぐるものと做した。「我れ此の世を何に譬へんや。」と耶穌は嘆息しつゝ、彼等を以て街路の日向で謎の如き遊戯を試み、一團が或る事を工夫すれ

ば、一方に座つてゐる一團が、其の意味を悟り、之に加つて共に戯るゝ小兒に譬へられた。此の時代の人々は一方に宗教の戯れを試むものもあるも、尙ほ憤怒せる小兒の如く更らに之に和せざる頑固の輩であつた。第一に彼等は婚姻の戯れを試みたが、ヨハネが彼等の笛に應じて踊らざるを憤つた。然るに彼等が葬式の戯れを試むも、耶穌は其の慟哭に和せられざるを憤つたのであつた。「蓋はヨハネ來りと食ふこと飲むことを爲されば「鬼に憑かれたるものなり」と人々言へり、人の子來りて食ふことをし飲むことを爲れば、又「食を嗜み酒を好む人、税吏罪あるもの友なり」と言ふ」

ヨハネ
の處刑

耶穌に訴へて來たのがヨハネの最期の行動であつた。ヘロデヤは久しく強請と阿諛とを以て手管を盡くしても應ぜられなかつた宿望を漸く達して、英雄的囚徒の頭上に一撃を加ふる事となつた。即ちアンテパスは自己の誕生日に、之を祝せんが爲め、マカエラスの太守居城へ宴筵を設けて、貴族や軍人を招

集した。宴酣にして豫期せざる餘興がヘロデヤの工夫で演ぜられた。彼女には、其の以前破廉耻極まる状態で棄て去つた夫との間に、後年トラコニチスの太守ピリポに嫁したサロメと言ふ娘があつた。齡漸く十七歳ばかりの處女なる此の美姫は、此の淫蕩なる來客の面前に、淫靡極まる舞踊を演ぜんがため宴筵の席上に伴はれた。此れ實に深窓の貴婦人殊に處女としては言ふに忍びざる破廉耻至極の所作であつたに拘はず、喝采讚嘆の喚聲はどよめき渡り、主公は悦に入つて、泥醉漢の尊大を以て得意満面の態であつた。彼はロオマの一卑官に過ぎなかつたけれども、ヘロデ大王の餘光に與つて、一般からは『王』と稱せられてゐた。且つ彼の虛榮心は此の稱號に得意であつた(可六〇十四、廿五、廿六、廿七、太十四〇。九、太十四〇一、路九〇(二〇十九)參照)。彼は娘を自分の前に招いて、ロオマ皇帝の許可に由らざれば、國土の一方哩も左右し能はざる身分を全く忘却して、東洋人特有の尊大を裝ひつゝ、彼女の求むるものは縦し其の領土の半ばなりとも、喜んで與ふべきを誓つた(帖五)。彼女は出てゝ、其の母に謀つたが、此の毒婦は策

略の圖に當つたことを私かに喜びつゝ、バプテスマのヨハネの首級を、宛然美はしき食物の如くに盆に盛つて與へられんことを求めしめた。彼は深く憂悶して、其の誓ひを取消さんことを冀つたけれども、其の當時の名譽に掛けては、之を實行するを得ず、遂に苦しくも意志に反し、處刑者を牢獄に遣はして預言者を斬首せしめた。處刑は行はれた。首は盆に盛つて宴筵の席に齎らされ、サロメに與へられた。此の恐ろしき獲物を彼女はヘロデヤの許に携へて來たが、フルヰキアの残忍にも比ぶべき妖婦は、番に之を見て樂むに満足せず、小柄を以て、會つて彼女の罪惡を彈劾した預言者の雄辯な舌を寸斷したと傳へらるゝ。

第貳拾七章 再び湖を渡りて

「善牧ひつじ羊者、眞のパン、

嗚呼耶穌は我等を恵みぬ。

汝我等を飽かしめ、

汝我等の楯となり、

地上に座ます汝を見得るやう、

我等に恵みを下し給へ。」

聖トマス・アケイナス

(太一四〇十二、可六〇廿九、太十四〇一、二、可六〇十四、六、路九〇七一九、太十四〇十三一、廿一、可六〇三十一、四十四、路九〇十一、十七、太十四〇二十二一、三十三、可六〇四十五一、五十二、約六〇十五一、廿二)

耶穌の悲歎

ヨハネの弟子たちは其の師の首なき死體を其の晩年の傳道地たりしアイノムに程遠からざるサマリヤの首府セバストに運んで、エリシヤ及び

オパデヤの墓の邊りに葬つたと傳へらるゝ。絶望に閉されたる彼等は耶穌を尋ねて事件を報告したのであつた。耶穌は深く感動せられた。傳道は一先づ切り揚げて、カペナウンに歸り、十二使徒の來り會するを待たれた。久しからずして彼等は親しく見聞せる事實の夥しき報告を齎して歸來したけれども、耶穌は之に耳を傾けらるゝ心もなく、皆の集合するや時を移さず彼等を伴ひてカペナウンを去り、湖の對岸に渡らるゝ事となつた。

東岸に赴いたる理由

何故に耶穌は斯く速かに出發せられたのであらうか。耶穌も其の侶伴も俱に傳道事業の疲勞を暫し癒さるゝ必要あり、又カペナウンの住民は此の一團の其の町に歸來せられたことをいたく悦んだのであつた。然るに何故耶穌は暫時も此所に留られなかつたのであらうか。一つは現下の悲劇に心を痛めて其の常時の事業に携はるゝ勇氣を失はれたのであつて、神との交通に心を潜めんがため隠退の時日を欲せられたのであつた。然るにカペナウンに於ては休養せらるゝ

第貳拾七章 再び湖を渡りて

山休養
の必要

機會が出来ないのであつて、市中は感激と熱狂の街と化してゐた。故に耶穌は十二使徒に『汝等衆人を避けて我と偕に暫く寂寞しき所に往きて休むべし』と仰せられた。此の隆々たる聲望には其の中心點となるべきものがあつた。即ち人民の間に一陰謀が企てられたのであつて、弟子たちも暗に之

(2)メツシヤに對する陰謀

と結んでゐたのであつた。蓋しメツシヤの事業を速かに完成せしめんがため耶穌を擁して、彼等が其の當然の權勢なりと思惟する所を遂行せしめ、イスラエルの王として降臨せられた目的を達せしめんと欲する計畫に過ぎなかつた。群衆も弟子たちも俱に耶穌の逡巡日を過ごさるゝに焦慮し、遂に之を擁して、王と宣言せんことを決心したのであつた(約六〇)。領袖等は其の事業に熱注し、右往左往の狀『往來のもの多くして食する暇も無かり』しほどなるを耶穌は觀取られ、此の半狂亂の計畫を鎮壓せんがため東岸に身を避けんと決心せられた。

此れに對して今一つの理由があつた。ヘロデ・アンテバスは耶穌の名聲の四方に

(3)アンテバスの好奇心

喧しきを聞いた。蓋し彼が其の風説を聞いたのは決して之が初めて無かつた。然しヨハネの處刑に由つて彼の良心安からざるの際に。更らに之を聞いて、彼は一方ならず狼狽したのであつた。彼は耶穌の何人なりやを怪み、其の屬僚を集めて之に諮るや、彼等は己がじ、流行せる各種の風説を供提し、或者はユダヤ人のメツシヤ降誕の準備に遣さるゝと待望せる如く、エリヤの再來せるものなりと言ひ、或者は單に古しへの豫言者に等しき人物なりと言つた。アンテバスは此の兩説に満足する事を得ず、自らの犯罪に絶えず憂悶し、其の罪過を負へる靈魂は、迷信的恐怖に戰慄した。彼は復活の教義を否定するサドカイ派に屬せしに拘はらず、斬首せるヨハネが死より復活し、神秘にして奇蹟的な力を以て、見えざる世界より姿を現はすに足るものとなつたのであらうとの考へに囚はれたのであつた。不信の徒に往々見る如く、アンテバスも亦遂に此所に陥つた。

「我等が最も安らかに暮す間に、落日の哀れに囚はれて、他の人の死の、鐘の音に思ひを促され、ユウリピデスの折り返しの句を偲ぶ——」

此れで自然界に等しく古く又新たなる

叢がる希望と恐怖とが、

我等の心を叩き、合圖して、入り來り、

古への神の礎石の上に手を連れ、輪となりて

踊り狂ふに足れり——（死の希望恐怖の入り亂るゝを言ふ）

實に宏大なる疑題！我等は茫然凝視するのみ。

此所に昔ながらの疑惑あり、歪がみ曲れる問題あり」

此れ蓋し人間の心には必らず神を要する憐むべき證據であつて、若し信仰を棄却すれば、人心は忽ちに下劣な迷信の犠牲となるのみである。

アンテバスは事實如何を驗せんが爲めに耶穌に接せんことを焦慮したので、テベリヤの彼の首都はカペナウンより十哩の湖邊にあつた所から、カペナウンを去らる

ゝが耶穌には便宜であつた。此の負ひ難き罪の重荷に苦しむ大守が更らに重過を添ふべき暴戾な待遇を耶穌に加ふべしとは思はれなかつたけれども、斯くの如き人物の面前に曳き出さるゝは不快の事實であつたので、耶穌は湖を渡つて此の煩累を避けんと欲せられたのであつた。蓋し其の地方はアンテバスの管轄外なるピリポの領土であつた。

ベテサイ
ダ・ユリアの
近郊

耶穌は十二使徒と共に舟に乗り、東北に舵を取つて、水豊かに地味好く沃えた平地の狭く走るベテサイダ・ユリアの近郊の地に來られたが、

時は恰かも春で、一面に縁の草葉は新しい絨毯の如くに敷かれてゐた。耶穌は閑靜な所に退く目的で此所に來られたのであるけれども、其の出發を觀取した大群の民衆はカナペナウンを後に、對岸に於て耶穌に會せんとして湖の北部を迂回して尾いて來た（約六〇四）。此れは甚だしい迂回であつて、彼等が此所に達せざるうち、耶穌は其の弟子と共に上陸して、平原背後の高丘に隱退せられた。間もなく耶穌は彼

等が遠路の旅に疲れ、或者は殊に憐れな様で近いて来るのを認められた。蓋し彼等のうちには治療を受けたいとの希望から、此の難路を喘ぎ喘ぎ歩いて來た病人さへもあつたからであつた。眞の牧羊者の心は牧ふものなき群民に對して憫憐の情に打たれ、其の隱退の地を出で、温かに彼等を迎へ、之に教へ、又其の病を癒されたのであつた。

群衆
養はる

進んで一層の恩恵を施された。耶穌は湖邊に連續する長い行列と、綠草に群がる民衆とを見らるゝや、糧食部員なるピリポを顧みて『我等何所より彼等に食はしむべきパンを買ふべきや』と問はれた。ピリポは驚駭した。彼は眼を縦ちて群衆を眺め、其の數を算して之に食を供すべき費用を計上した。殆んど一シリング（日本貨幣五十錢内外）と相均しき一デナリが當時の一人の日備費であつて、一家五人平均ありとし、一人三個宛とすればパン代半デナリに當ることを彼は忽ち計算したのである。若し半デナリを以て五人に三個宛のパンを供し得ると

すれば、二百デナリを以ては六十人の大衆に一個宛を與ふことが出来る。今此所には小兒と婦人の外に五千人の群衆があつて、皆食に飢えてゐるのであつた。『二百デナリのパンも人毎に少しづゝ與へて尙ほ足らざるべし』と兵站部長は絶望して答へた。

五のパン
の魚

斯かる間に事實が明かとなつた。耶穌が教訓と治療に努力せらるゝ間に、弟子たちは其の方法を講じたが、漸く日も暮に及ばんとするので、群衆をして近傍の村々に行きて食物を購はしめんが爲め、之を去らしめんことを耶穌に勧めた。然るに『汝等之に食を與へよ』と耶穌は答へ給ふた。彼等は其の不可能なるを辯明したが、ピリポの友人アンデレは、有効な食料としては、今群衆が競ひ買はんとしてゐる五つの大麥のパンと二つの魚とを漁夫の少年が賣りに來てゐるもののみであることを説明して、『然れどこの許多の人に如何にすべきぞ』と言つた。耶穌は一語も答へず、唯だ食事の用意を爲すべきを命ぜられたが、彼等は異議なく

其の命に服するほど耶穌に信頼したのであつた。彼等は衆人を百五十人宛一組として芝生の上に座らしめた。蓋し混雜を避け、又洩るゝものなきやうに注意する便と、又其の團體の數を算ふるに備へたのであつた。席定まるや、耶穌は食物を祝して衆人に食を運ぶ弟子たちに渡されたが、見よ、空虚の倉庫は無盡の源泉と化したのであつた。與へられても與へられても尙ほ、食料は此の救主の聖手のうちに發生するのであつた。『二百デナリのパンも人毎に少しづゝ與へて尙ほ足らざるべし』とピリポは主張したが、耶穌の祝さるゝ五つの大麥のパンと二つの魚とは無限の量となつた。『皆食ひて飽きたり』。否な單に彼等の飽きるほど充分であつたのみならず、尙ほ過剰があつた。ユダヤ人は旅行に赴くとき必ず食料を入れた籠を擔つて出た。それは未見の人の食物を食ふ穢れに陥る場合があるからであつた。其の籠はユダヤ人たる徽章となり、異邦人の嘲笑の的となつた。四方に流浪する使徒たちも亦此の籠を擔つてゐたが、何物をも浪費せられない主の命に由り、又恐らくは彼等をして奇蹟

の確實な證據を握らしむる計畫で命ぜられた所に由つて、彼等は其の饗應の殘物を集めたが、其の屑は十二の籠に一杯に満ちたのであつた。

此の奇蹟の意義

此の驚くべき奇蹟には、其の眞の意義を示すに足る特殊の性質がある。

由來耶穌は特に要求を受け、他に爲すべき手段なきに於てのみ、奇蹟を行はれたが、此の奇蹟は、其の慣習を破られた一例のやうに思はるゝ。此の奇蹟には表面別に必要に迫つた事情がないかのやうに見えるのである。群衆は近傍の村々で食物を容易に得る事が出来たのであつて、弟子たちの意見も其所にあつた。然るに耶穌は之れを貶けて奇蹟を行ふ決心をせられた(可六〇三六、太十四〇十五、路九〇十二)。此れには確に群衆の饑饉を癒やす以上の目的を有せられたのであつた。耶穌の靈魂は近頃の事件殊にバプテスのヨハネの死の爲めに憂悶せられ、唯一の親しい關係を有せられて深くも之を愛せられた人物の悲劇的末路に、聖旨には實際以上に深い痛みを覺えられたのであつた。此の暗憐たる悲劇の中に耶穌は己れに聽て轉じ來るべき悲惨な運命

を看取せられたのであつた。彼等が全力を盡してヨハネに加へた所は、又同じく人の子の彼等の手に苦しめられ給ふべき豫告である(太十七)。此れ實に寤寐にも忘れず豫知せらるゝ所であつて、其の暴虐なる光景に戦慄せられたのであるが、今や宛然比喩の形體を以て身に迫つたのであつて、其の恐怖は潮の如く押寄せて來たのであつた。日ならずして底を拂つて飲み盡されざる可らざる苦がき杯を早や既に味はれてゐるのであつた。詩篇の作者の悲痛は耶穌の戦慄く靈魂の叫びであつた。曰く「怖れと戦慄さと我に望み、甚だしき恐懼我れを蔽へり。我れ言ふ、願くば鴿の如く羽翼のあらんことを、然らば我れ飛び去りて平安を得ん、見よ、我れ遙かに遁れ去りて野に住まん、我れ速かに遁れて暴風と狂風とを離れん」(詩五十五)。

晩の
預言

十字架は前程は鮮やかなるに、其の弟子たちは玉座を夢みて、王として宣揚せんとする群衆と陰謀を俱にするを見らるゝは、耶穌の苦悶に一層の悲愁を加ふるものであつた。ベテサイダに隠遁せられたのは、唯だ十二人と團

樂して、彼等の鈍き心を開いて幾分にも高尚、眞正の觀念を耕さんと欲せらるゝ爲めであつたが、夥しき群衆の此所までも尾し來るを見らるゝに至り、之をいたく悲まれた(約六)。然かも其の目的は尙ほ之を棄てず、彼等の來るを見らるゝや否や、其の機會の到達せざるに先立ちて早くも計畫を廻して、奇蹟を行はんことを決心せられたのであつた。聖ヨハネが明かに悟り得たやうに、時は恰かも、回顧すれば遠き古へにイスラエルをエジプトより贖出し、又望めば更らに一層有力なる贖ひを指示すべき逾越節近からんとする交であつた。一年の後、偉大な事業は完成せられ、贖主は、爾來其の無限の意義ある犠牲を記念せらるべき逾越節の饗宴を新たに創立せられたのであつた。聽て其の付され給ふ夜、パンを取り、祝して、之を擘き弟子に與へて『取りて食へ、我れを記憶せんが爲めなり』と仰せらるべき時を豫め察して少なからず感激せられたのであつた。其の同伴を樓上の客室に集めるゝに先立ち、早くより耶穌は其の爲すべき所を計畫し、『我れ苦難を受る先に汝等と共に此の逾越

を食する事を大いに願へり』(路廿二)と仰せらるゝ如くであつた。少くも一ヶ年以上耶穌は其の目的を包まれた。而してペテサイダに於て群衆に食を供せられたるとき、聖禮典を心に描かれたに相違はない。故に此の奇蹟は預言であつた。而して其の真意は當時視はるべくもなかつたけれども、萬事が完了したとき、始めて明瞭となつた。

聖禮典の語を用ふ

此の奇蹟を記すに當り、福音記者が何れも聖禮典の語を用ゐてゐるのは偶然であらうか。聖マタイは此の奇蹟を叙して『耶穌五つのパンと二つの魚を取り、天を仰ぎて謝し、パンを擘きて弟子に與ふ、弟子之を衆人に與へぬ、皆食』(太十四十九、二十、可四〇四十一、二、路九〇十六、七)へりと言ひ、又其の樓上の客室の光景を叙しては『耶穌パンを取り、祝して之を擘き、弟子に與へて曰けるは取りて食へ』と言つてゐる。聖ヨハネは此の奇蹟を叙して『耶穌パンを取り祝して弟子に與へ、弟子是れを坐りし人に與ふ』(哥前十一〇)と言ひ、聖パウロは晩餐

の口碑に傳はる所を叙して『パンを取り祝して之を擘き』(約六〇廿二)と言つてゐる。次の日に一同と共にカペナウンに歸り、其の奇蹟を行はれた當時心に有せられた思想を發表して『生命のパン』の教へを會堂に於て試みられた。『我れは生命のパンなり、天より降れる活けるパンなり、若し人此のパンを食はゞ窮りなく生くべし、我が與ふるパンは我が肉なり、世の生命の爲めに我れ是れを賜へん』と。

王の計畫

此の奇蹟が群衆の熱狂に更らに薪を加へた。耶穌は確かにメツシヤである。故に彼等は其の下劣な計畫を遂行するに一層熱烈となり、時期は又恰好であつた。逾越節將に近からんとして、エルサレムは禮拜者を以て埋もるべき筈であつた。故に彼等は唯だ勝利の鹵簿を調へて耶穌を王なりと宣言すれば足るのであつた。忽ち耶穌は雲霞の大群に歡呼を以て包まれ、其の祖先の玉座に國民の喝采のうちに陞らるゝであらうと考へた。彼等の陰謀を觀取せらるゝや、耶穌は弟子たちを強いて乗船せしめ、カペナウンの繫船場ペテサイダへと出帆せしめ、己

れは群衆を避けつゝ、山上に私かに隠れて、祈禱に身を委ねられた。

耶穌湖
上を歩
み給ふ

日は夙に暮れて、夜は更けた。而して暴風が起つたけれども、耶穌は外界の喧騒に眼もくれず、只管に天の父との交通に熱注せられた。漸くにして起ち上られたときは天明けて、湖上を俯瞰せらるれば、風と波とに翻弄せらるる小舟を湖心の彼方に認められた。危急の場合彼等は其の主の彼等と共に在まさんことを頻に願つたが、驚くべし、彼等の主は傍近く現はれ給ふのであつた。耶穌は波の上を歩いて居られた。耶穌は傍近く來られたけれども彼等は之を祝福しなかつた。ユダヤ人は夜は友人に逢つても、惡鬼が友人の形を取つてゐるかも知られないと言ふので、決して挨拶を交はさなかつた。彼等の見る所は惡靈ならんと信じ、之に挨拶せず、驚駭と共に相誠むる聲を思はず發したが、耶穌は此れを聞いて「懼るゝ勿れ、我れなり」と仰せられた。「常に熱情に富み、兄弟よりも進める」ペテロは直ちに「主よ、若し汝ならば、我れに命じ、水を履みて汝の所に至らしめよ」と答

へた。「來れ」との耶穌の聖語を聞いて、其の足の波に觸るゝや否や、恐怖の情は此の猛烈な弟子の心に湧いて、彼は沈み始めた。「主よ我れを助け給へ」と叫んだので耶穌は手を伸べて之を助けんが爲めに捕へ給ふた。弟子たちは異口同音に驚き叫ぶ間に、彼等の主は歡ぶ彼等に迎へられて舟に乗られたのであつた。風は凧ぎて一同其の志す方へ舟を走らしたが、驚きと喜びに一瞬時と思ふ間に舟は岸に達した。基督の在さざるとき、其の民は遅々として歩むを得ず、尙ほ艱難辛苦を被る。されど基督來りて彼等と俱なり給はゞ、嗚呼彼等は疾く其の航路に走るを得、忽ちにして其の旅程を盡くすを得べし!」。

此の奇蹟の意義

此れ實に驚く可き物語にして、數世紀の間信仰に困難を感ぜられ、不信者の嘲笑する所となつたものである。此れは到底不可能なることが明白のやうに思はるゝ。ストラウスは「此の記事を特に信ずるに難き理由は是なり。如何なる人類の體軀をも、苟も除外例を許さず支配せる法則に、單に耶穌の體軀のみ

免れ得るが如し。即ち引力に抗するものにして、耶穌は唯だ水に沈まれざりしのみならず、之に濕されず、堅固なる地上に於ける如く波上に浮びて歩まれたるは自然法に反す』と論じた。又是れは甚だ奇怪の事實のやうに思はるゝ。第二世紀の後半ルシアンが彼の得意な鋭敏骨を刺す毒舌の砲撃を假借する所なく加へて以來絶えず不信者の嘲笑の的となつてゐるのである。是れに對して如何なる答辯を爲すべきであらうか。十八世紀の自然派は之を説明し去らうと企て、暴風の狂ふ間に小舟は陸近くに吹き寄せられて、弟子たちが耶穌を見たときには、耶穌は唯だ陸岸を歩いて居られたので、水上を歩かれたのではないと主張した。ストラウス以來奇蹟を信ぜべからずと爲すの徒は、此れを神話なりとし、舊約聖書中の江海渡渉の物語や、エリシヤがエリヤの上衣を以て其の水を打てる時ヨルダンの河水の分れた記事(王下二四)のみならず、皆彼の詩篇の作者が「汝の大道は海の中にあり、汝の徑は洪水の中にあり、汝の蹤跡は尋ね難かりき」(詩七十七)と言へる詩にユダヤ詩人の大

膽な想像なりと論斷する標準を求めてゐるのである。

復活の豫言

然し斯くの如き維々たる方法を以て此の物語を棄て去る譯には行かない。事實此の奇蹟は群衆に食を供せられたと等しき重大なる預言的目的があるのである。主の聖胸は未來の豫想——「基督の受けんとする苦難と其の後得んとする榮」(彼前一〇十一)とに充ち満ちてゐた。故に此所で十二使徒の思想を導いて、來るべき所に應ずるの準備を爲さしめんと欲せられたのであつた。パプテスマのヨハネの死を聞かれたる日より教育の搖がざる目標は最期の事件——其の死と復活とを了解せしむるにあつた。斯くして群衆に食を供せられたのは晚餐と其の死との預言であつて、此の奇蹟は復活の預言であつた。勿論人間の體軀で水上を歩むは不可能である。然し靈體は自然法以外の法則に支配せらるべきものであつて、若し閉ざしたる屋内に入り來つて、其の弟子の集會せる室に現はるゝことが、復活せられた主に可能であつたとするならば、神の大能に由つて靈的狀態を取つて水上を歩まる

「ことも可能であると言はねばならぬ(約二十〇十)」。弟子たちは當時此の説明し難き秘義を悟ることは出来なかつた。彼等にして若し彼等の主の奇蹟を目撃し、之を確信したりとせば、此れを以ても尙ほ、世の反對論が如何に跳梁を極めても、耶穌に對して一指も染むるを得ないのである。

第二十八章 カペナウンに於ける論争

「耶穌は其の天國を愛するものを多く有し給へり。然れども其の十字架を貢ふものは稀れなりき。耶穌は口を以て行動を共にするものを多く有し給へり。不風の同勞者は極めて少なし。其のパンの爲めには多くの従者を有し給へり。然かも其の苦難の苦き杯を飲まんとするの従者は稀れなり。奇蹟の故に耶穌を貢ふもの多しと雖も、十字架の耻辱を俱にするの従者は稀れなり」。

基督の模倣第二卷第十一章第一節

(太十四〇三十四一六、約六〇二十二一七〇一、太十五〇一一二十、可七〇一一二十三、路六〇三十九)

民衆
當の惑

弟子たちの乗船するのを見ても群衆は悉くは散開しなかつた。蓋し耶穌が小舟のうちに見えないのを知つて、彼等の或るものは耶穌が再び出て來られるであらうとの望を以て夜の明けるまでも家に歸らうとも爲なかつた。夜

の間にテベリヤの小舟の一隊は必然其の日の暴風に押し流されて陸近く漂つて來たので、彼等は此等に便乗してカペナウンに歸つたが、彼等の歸着するや、驚くべし、耶穌は彼等より先きに歸つて居られたのを發見した。

如何に解すべきかを彼等は惑ひつゝも、其のメツシヤたることを確信し、昨夕の奇蹟を以て其の確信は愈強固となつた。第一の贖主あひなひぬしモオゼが天よりのパンを以てイスラエルを養つたやうに、第二の贖主メツシヤも亦之を供すると言ふのがユダヤ人の間に行はれた思想であつた。否管に其れのみならず、彼等をバシヤンの野に導いて、マナを彼等の爲め再び降らしむるものとせられた(約六〇三)。古人のバシヤンとはバタニアのベテサイダの野の事ではないか。耶穌は確實にメツシヤに相違はない。然るに何故に其の權威を棄て、之を王として宣言せんとする彼等を遁れて山に入られたのであらうか。彼等は衷心より困惑したが、其の當時萬事を悟るべき機會は到來したのであつた。此れは一週間、會堂に於て禮拜の行はるべき兩日、即ち月

曜日か、木曜日かのうち何れかであつた(約六〇五十九)。耶穌は會堂に出席して説教せられたが、其の習慣に従つて後に質問を許された。

會堂に於ける
問答

迷信的觀察者には耶穌が其の休徴を表はして充分の成功を遂げられたものと思はれた。耶穌は今や、其のメツシヤなるを主張し、國民に之れを認識せしめんとして證明に熱注する群衆の讚美に包まれ給ふたのであつた。然し耶穌を以て見らるれば、此れは殆んど全然失敗に近き、失望すべき苦しき時機であつた。群衆の熱注は畢竟、其の天職を誤り信じて感激してゐるに過ぎない。彼等は耶穌を以てメツシヤと認むるけれども、尙ほ彼等は其の軛の下より彼等を救ひ、豊かにパンを供給すべき地上の王としてメツシヤを考へてゐた。耶穌の喜び給はざるは、彼等の讚美が此の誤れる思想に基けるが爲めであつて、今や極力彼等の心中に期する所を斥けて、之に蔽はんとする事實を排せらるゝ必要の時期に際會せられた。即ち耶穌は其の行動に取り掛られた。先づ第一に彼等の非靈的なるを叱責して

「誠に實に汝等に告げん、汝等の我れを尋ねるは休徵しるしを見し故に非ず唯だパンを食して飽きたるが故なり」と仰せられた。尙ほ進んで昨夕と昨夜との奇蹟を説明して、其の死と復活との豫表なるを示めし、神秘的な教訓を施された。彼等は天よりのパンを以て養はるべき救主とのみ望んでゐる。「神のパンは天より降りて生命いのちを世に賜ふるものなり。我れは生命いのちのパンなり、我れに就きかるものは饑えず、我れを信ずるものは恒に渴く事なし、誠に實に汝等に告げん、若し人の子の肉を食はず、其の血を飲まざれば汝等に生命いのちなし、我が肉を食ひ、我が血を飲むものは永生かぎりなきいのちあり、我れ末期まはりの日に之を復活よみがへらすべし」と。

耶穌に
奉從す
る試験

此等の教訓はユダヤ人の耳には我々が聞くほどに不思議ではなかつた。聖書のうちにも、ホラビの文書にも等しく教訓をパンと稱し、之に心神を集中するを食ふと言つたものである。預言者エレミヤは「我れ汝の語ことばを得て之を食へり」十五〇）と言ひ、ユダヤ教經典の中には「パンを以て彼を養へ」即ち彼を

して律法を學ぶに努めしめよ、「來りて我がパンを食へ」とあればなり」とある。尙ほ我等の主の聖語みことばに一層酷似したものは「メツシヤを食ふ」てふユダヤ教經典の語であつて、此れは喜んで之を受け、其のあるがまゝ教訓を會得する事であつた。然るに拘はらず、其の聽衆は、十二使徒すらも尙ほ、其の場に於ては主の神秘的な教訓の意義を悟り得るものはなかつた。主も亦彼等が之を悟り得るものとは期待せられなかつたのであつた。唯だ彼等の信仰を試験し給ふ計畫であつたが、彼等の忠誠の念は其の幻想の消失すると共に搖がなかつたであらうか。

一般
の
錯
乱

耶穌は深重に此の試験を行はれたのであつたが、其の結果は如何であつたらう。有司たちや、民衆の間に混じた彼等の黨派が、激怒して憤慨したのは既に驚くに足らぬ。彼等は「彼が父母は我等の識る所ならずや、即ち彼はヨセフの子耶穌いすすに非ずや、然るに何ぞ「我れは天より降りし」と言ふや」と譏つよやき、又「此の人如何で其の肉を我等に賜へて食はしむる事を得んや」と譏つよやいた。彼等が

斯く思ふは當然の態度であつて、耶穌は最早や之を失望せられないのであつた。然し耶穌は今少しく進んだものと期待せられた他の團體が——即ち耶穌の跡を慕つて、弟子なる名を冠せられた人々があつた。彼等は如何に此の試験に應じたであらうか。耶穌は彼等に希望を繋かれたのであつたが、悲しむべし、彼等も亦其の信任に背く甚だしきものであつた。此れ甚だしき語なり、誰か能く之を聽かんや」と讒きつゝ、彼等の多くは「返り往きて、耶穌と偕に行るかざりき」。耶穌は唯だ十二の使徒のみとなられた。而して彼等の困惑した顔を凝視つゝ、温言を以て「汝等も亦去らんと思ふや」と靜かに問はれた。彼等の忠誠の念は頗る搖いで、遁るべき道あらば彼等も、亦耶穌を棄てんとする志が見えたものと思はるゝ。然し彼等は餘りに深く身を投じたものであつて、其の萬事を擲つて耶穌に従ひ、唯だ其の王國と玉座とを獲得せらるゝ日の褒賞をのみ心掛けてゐるものであつた。萬一彼等にして耶穌を棄て去らば、唯だ世の嘲笑罵詈を受くるに過ぎない。此の耻辱

十二人忠
信を以て
留まる

の爲めに彼等は辛くも踏み止まつたものであつた。更らに彼等には忠信を獻ぐる一層高い理由があつた。彼等の觀念は全く誤つてゐても彼等は其の主を愛し、其の恩寵に對して偉大な發見を遂げて居た。「汝等も亦去らんと思ふや」との主の問に對して、常に十二人中の代言者にして、最も耶穌を愛したペテロは答へた。彼の應答は、始めは失望に泣くやうに、漸次情熱と勝利の信仰に燃え昇る不思議な不調和な語であつた。「主よ。我等誰に往かんや、永遠生命の語を有るものは汝なり、又我等信じて知る、汝は神の聖なるものなり」と。

彼等の
誅叛人

是れ實に憐れな、出任せの告白であつて、耶穌には、其の使徒すら尙ほ信仰極めて薄弱にして、天の王國の事情に就き、又將に來るべき危急に對する準備に就いて、如何に深き訓練が必要であるか、明かであつた。ペテロは彼等のうちの最も勇敢にして、其の信仰最も熱烈なるものである。然るに此れをしも彼が達し得る信仰の極致ならしめば、他の十一人の狀は將た如何であらう。耶穌

は其の結果を明かに豫知せられ、「我れ汝等十二人を選びしに非ずや、然れど其の中の一人は悪魔なり」と仰せられた。然り、此所には心を潔むる事は扱て措き、却つて大罪を企らむ人物が一人ゐたのであつて、福音記者は「此はシモンの子イスカリオテのユダを指して言へるなり、彼は十二の一人にして耶穌を賣さんとする者なり」と註釋してゐる。

傳道
繼續

民衆は耶穌に反抗したけれども、忽ちにして彼等は耶穌ならざる可らざるを悟つた。耶穌は尙ほ彼等の間にあつて其の事業を繼續せられた。エルサレムに於ける王位の望は消散したのに彼等は何をか求めた。彼等の苦惱や慘事は依然として絶えないからであつた。而して耶穌の恩寵と權威とは少しも衰へないのであつた。彼等は血漏を病らつた婦の如く耶穌の衣の裳に唯だ觸れしめんが爲に其の聖足の下に從來の如く病者を伴ひ來つた(可九〇二十、路八〇四、參照)。逾越節は來たけれども有司たちの殺氣を帯びた計畫を洞觀せられた耶穌は、尙ほガリラヤに留まられた

(約七〇二) 此の時期に死する覺悟は定めて居らるゝけれども、尙ほ多くの事業が残つてゐるのであつた。耶穌の時は未だ轉還しない。有司たちは耶穌の上られないのに失望した。而して之を殺さんと決心して、カペナウンの官憲と結托せんが爲め、パリサイ人とサドカイ人との代表者を送つた。依然として群衆の敬慕に擁せられ給ふ耶穌に對して、此等の惡黨も手を下すべき道がなかつたけれども、其の手中に陥るべき口實を發見せんと焦慮しつゝ、嫉視耿々只管に機會を窺つた。

サンヒデア
リウムの
密使

手洗
の攻撃

久しからずして事成れりと喜んだ一事を彼等は發見した。ラビの律法のうちに洗淨に關する儀式、殊に食事の前後に手を洗ふ事以上に大切な問題はなかつた(路十一〇廿七、參照)。手を洗はずして食するは身を汚穢に委ねるものであつて、破門に該當する罪過であつた。加ふるに迷信が一層此の諛に重きを加へたのであつて、シブタと稱する惡鬼がゐて、手を洗はず食物に觸るれば此の惡鬼が夜

間に來つて其の人に憑くものと做られた。是れ實に奇怪至極の說であつて、畢竟、如何にユダヤの宗教が墮落して、儀式も遂に中心の意義を失つたかを示めすに足るものである。然かも斯く下劣であつても迷信は其の信者の熱心な爲めに殆んど窮極の力を揮ふに至つた。傳へらるゝ所に由ればラビ・アキバは會つてロオマ人から牢獄に繋かれたことがあつたが、彼は洗身と飲料とに充分足るだけの水を毎日給與せられた。然るに一日司獄官の命令で水の給與を減せられた。『手を洗ふ水をくれ』と彼は言つたが、『我が師よ、水は飲むにすら足りないほどであります』と給仕してゐた彼の弟子が答へた。『如何しやう。先祖の命じた儀式を犯すより死ぬるに若かず』とアキバは叫んだと言はるゝ。

主の
答辯

探偵の歩を進めてゐた主の敵は、其の弟子が此の大切な儀式を等閑にするを觀察して、是れ實にモオゼの律法を犯すのみならず、彼等の眼には一層極悪重過と認むる『祖先の傳説』を犯す、言ひ様なき大罪であると認められた。

彼等は耶穌に迫つて、説明を求めたが、耶穌は大膽にも侮蔑の態度を以て答を與へられた。此の兇惡不信不虔てふ誣言を其のまゝに彼等の面に擲げ返へされた。『汝の弟子、古への人の遺傳を犯すは何故ぞ』と彼等は尋ねた。耶穌は此れに應じて『汝等は亦汝の遺傳に由りて神の誡めを犯すは何故ぞ』と反問せられた。是れ實に重大な罪過である。耶穌はユダヤ人の詭辯の驚くべき例證を捕へ來つて之を利用せられたのである(太廿七)。神に對して誓つたことは宗教の習慣上では神聖なものである。是れはコルバン即ち献物であつて祭司の手に渡すべきものであつた。意地悪い工夫を凝して此の敬虔な誡めすら非宗教的な往々不都合な目的のために供せられたのであつた。例へば負債者が其の償却を拒んだとすると、債権者は『汝に貸したるものはコルバンなり』と言ふのが常であつた。而して債権者は其の額の多少を割いて神殿の會計に献げた。故に若し負債者が其れを償却しなければ、是れ神のものを盜むの罪に當るに至るのであつた。此れはまだ罪の無い行動であつたけれども、此所に

耶穌が引用せらるゝ、息子が其の両親の需用品を供給するに當つて同じ形成を應用するに至つては言語同斷の所業であつた。『我が汝に供ふべきものは禮物なり』と言はゞ如何と耶穌は彼等の語を引用せられた。是れは往々行はれた所であつて、有司たちは自己の利益の上から寧ろ之を獎勵したのであつた。事が既に人道に背く格別の所業であるのは勿論、神の名に於て斯くの如き罪を構ふるに於ては實に假借すべからざるものである。『汝等俳優よ、イザヤは能く汝等に就いて預言し、「此の民は口にて我れに近き、唇にて我れを敬へども、其の心は我れに遠かり、人の誠めを教へとなして徒らに我れを拜す」(賽廿九)』と言へり』と叫ばれた。

眞の
穢れ

此れ實に敵を粉碎すべき答辯であつて、耶穌は威壓した相手から轉じて、争論を傍觀する左右の人々に向つて『聽きて悟れ、口に入るものは人を汚さず、口より出づるものは是れ人を汚すなり』と仰せられた。此の時パリサイ人はいたく憤つて去り行くを見送れる十二使徒は、彼等の復讐を思ふて戰慄さつゝ、

主の語に對して抗議した。耶穌は彼等の杞憂を誠め、パリサイ人の團體の末路を預言して『我が天の父の植ざるものは皆抜かるべし。彼等を棄て置け』と言ひ、又今論争の對手であつた敵を瞰して『替者の相する替者なり、「若し替者替者の相せば二人とも溝に落つべし』』と言ひ渡された。此れ人口に膾炙する格言であつて、曾つて傲慢な宗教家の特性を喝破するに用ゐられたもので、傍聽者に誤解を與へないやうに彼等を誠め給ふた。

十二使
徒の
鈍性

耶穌が比喻を以て群衆に教へられた後には、直ちに來つて其の意義を質すのが十二使徒の習慣であつたが、パリサイ人との争論の後、家に歸るや否や彼等は耶穌に訴へた。即ちペテロが『此の譬を我等に解き給へ』(可四〇三、三六)と實際人を穢すものに就いての耶穌の宣告の意義を尋ねた。此の眞理のうちには少しも譬はないけれども、彼等はユダヤ人的偏見に囚へられて、其のうちに隠れた何等かの意味のあるものと想像した。潔き食物と潔からざる食物との區別は尙

ほ彼等には容易ならざる問題であつたからして、耶穌イエスが此の區別を排斥せられやうとは思ひ設けない所であつた。従つて不潔の思想以外に人を穢すものなしとの耶穌イエスの教理を受け容るゝ事の出来なかつたのは當然である。爾後數年にしてペテロは尙ほユダヤ人の偏見から遁れる事は出来なかつた(使十〇九—一十五)。耶穌イエスは彼等の心の遲鈍なるを悲まれ「汝等も未だ悟らざるか」と叫ばれた。

使徒の教
育隠る事
こなる

此の事件以來重大な決心を愈固く定められた。時は迫まれるも、十二使徒は尙ほ主の歿後其の兩肩に委ねらるる事業に對して準備は不充分であつた。彼等は未だ何等の智識なく、非靈的であつた。故に耶穌イエスは天國の事情に關して彼等の教育を其の専心の事業とせらるゝ決心をせられた。カペナウンに於ける耶穌イエスの事業は終を告げた。永年主の在住に由つて恩寵を被つた此の市を出で、唯だ使徒たちのみと靜かに隱退せらるべき個所を求めて、密接な離れざる交りを結びつゝ、彼等の知らざる可らざる所を啓示せらるゝ事とはなつた。

大正十一年十二月九日印刷
大正十一年十二月十三日發行

(定價貳圓五拾錢)

不許複製



譯者 日 高 善 一
發行者 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地 福 永 文 之 助
印刷者 東京市京橋區銀座四丁目一番地 村 岡 徹 三
印刷所 東京市京橋區銀座四丁目一番地 福音印刷株式會社

發行所

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地 警 醒 社 書 店

振替東京五五番番
電話銀座二一五八七番
二六九九番

田中	ス	原著	達譯	□	耶穌基督傳	定價	壹圓參拾錢
ニ	コ	ル	原著	□	基督傳	定價	壹圓九拾錢
柏	井	園	譯著	□	耶穌傳	定價	拾八錢
栗	ノ	イ	原	□	耶穌傳	定價	六拾錢
原	マ	ン	基	□	耶穌傳	定價	壹圓五拾錢
基	原	著	譯	□	耶穌傳	定價	拾五錢
加	藤	一	夫	□	美術上の基督	定價	拾五錢
賀	川	豊	彦	□	基督傳論爭史	定價	貳圓五拾錢
溝	ソ	ル	ト	□	福音記者の基督觀	定價	四拾錢
口	悦	次	譯	□	福音記者の基督觀	定價	六拾錢
二	瓶	要	藏	□	人の子耶穌	定價	壹圓八拾錢
賀	川	豊	彦	□	イエスの宗教と	定價	貳圓貳拾錢
				□	其の眞理	定價	八錢
野	々	村	戒	□	基督教史の研究	定價	參圓五拾錢
日	野	眞	澄	□	基督教教理史	定價	拾八錢
				□	基督教教理史	定價	六拾七錢

發行所 東京 警醒社書店 振替 東京 五番 三番

574
127

終

